

南平遺跡

発掘調査概報

—原村の縄文遺跡がいまよみがえる—



1998. 3

長野県原村教育委員会



南平遺跡（北から）



環状にめぐる住居址群

はじめに

原村では現在、圃場整備事業を進めていますが、それに伴い消滅してしまう遺跡が生じてしまうのもまた事実です。そこで原村教育委員会ではそのように消滅してしまう遺跡を、記録を残すことによって後世に伝えるために、事前に発掘調査を実施しています。本書で紹介します南平遺跡は平成9年度に発掘調査を行い、大きな成果をあげることができました。今回はその発掘調査の成果の一端を調査概報という形でお伝えするもので、ふだん考古学になじみの薄い方にも親しんでいただけるよう平易な記載に努めました。なお、正式な調査報告書は後日改めて刊行する予定です。

本書をお読みになるにあたって

- 1 本概報は「平成9年度県営圃場整備事業原村西部地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村9552ほかに所在する南平遺跡の緊急発掘調査概報です。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成9年5月6日から9年11月17日にかけて実施したものです。調査は櫻井秀雄（長野県埋蔵文化財センター調査研究員・平成9年度原村派遣）が担当しました。
- 3 本書の執筆は、III章1項を川崎保氏、同章2項を角張淳一氏、それ以外は櫻井が行いました。櫻井の執筆部分については原村教育委員会文化財係長平出一治の指導および同係平林とし美の助言を得ました。
- 4 測量基準点設置及び航空撮影・測量は株式会社写真測図研究所に、本書に掲載した土器の実測及びトレース作業は株式会社シン技術コンサルに、石器の実測及びトレース作業は株式会社アルカに、放射性炭素年代測定は株式会社古環境研究所に、琥珀製品の产地同定分析は（財）元興寺文化財研究所に、それぞれ委託しました。
- 5 III章1項の網点スクリーントーンは繊維が含まれていることを示します。
- 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保存しています。
- 7 発掘調査から概報作成にいたる過程に際しては、以下の方々からご指導ご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）
指導・協力：宇賀神誠司、白田武正、河西克造、上沼由彦、川崎保、小林公明、小林秀夫、小松隆史、澤谷昌英、白沢勝彦、田村彬、寺内隆夫、長沢宏昌、贊田明、原明芳、櫛口誠司、廣瀬昭弘、藤原直人、藤森伸太郎、保坂康夫、水澤教子、綿田弘実、佐久考古学会、諏訪考古学研究会
土器復元協力：赤羽利治、片桐信子、金子幸雄、坂田昭二、塙原和子、中沢由美子
土器拓本協力：馬場玲子、実測協力：大塚正枝、作表協力：原田京子
なかでも川崎保氏からは絶大なご指導ご協力を賜りました。

目 次

は じ め に	1
本書をお読みになるにあたって	2
I 発掘調査の概要	4
1 発掘調査に至る経過	4
2 発掘調査に参加された皆さん	4
3 整理作業に従事された皆さん	4
4 発掘調査の方法	4
5 発掘調査の経過(抄)	5
6 遺跡の位置と環境	5
II 遺 跡 の 概 要	8
1 概 観	8
2 発見した主な遺構と遺物	11
(1) 穹穴式住居址	11
(2) 小 穹 穴	24
III 特 報	32
1 縄文時代早期末の土器	32
2 南平遺跡の石器	38
3 南平遺跡にみられる二種の陥し穴	49
4 原村、南平遺跡における放射性炭素年代測定	55
5 南平遺跡出土の琥珀製品の分析報告	56
IV ま と め	58

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

平成5年度から実施されている「県営圃場整備事業原村西部地区」も5年目をむかえました。農地整備は原村の将来を考えますと必要なことあります。しかし一方では南平遺跡を破壊してしまうことになってしまいます。南平遺跡は今まで正式な発掘調査を実施したことはありませんでしたが、古くからその存在が知られる、原村でも注目されていた遺跡でした。

本来、遺跡は現状のまま保存していくことが最も望ましいことですが、農業者の強い要望もあり、長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者による協議の結果、次善の策として「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成9年度に緊急発掘調査を実施して、記録保存をはかることとなりました。

原村教育委員会では、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、また農家負担分については国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けて、平成9年5月6日から11月17日にわたりまして緊急発掘調査を実施しました。調査担当者には平成9年度に財団法人長野県埋蔵文化財センターから原村教育委員会へ派遣された調査研究員の櫻井秀雄があたりました。

2 発掘調査に参加された皆さん（敬称略、五十音順）

朝日治郎、今井けさほ、鎌倉春江、吉川幸子、久根種則、小池英男、小島政雄、小林喜重、小林多美、小林ますみ、小林ミサ、小林りえ、小松弘、五味元、五味八代江、坂本ちづる、清水了、清水太助、清水千代子、清水正進、進藤郁代、田中初一、津金喜美子、常田啓子、中村きみゑ、西沢寛人、野明昭子、林史子、平出藤平、日達今朝江、宮坂とし子、森山源司

3 整理作業に従事された皆さん（敬称略、五十音順）

朝日治郎、小林りえ、坂本ちづる、清水正進、進藤郁代、津金喜美子、林史子

4 発掘調査の方法

南平遺跡は、圃場整備事業によって遺跡のほぼすべてが破壊されてしまうため、今回の調査が最初でかつ最後の発掘調査となりました。そこで遺跡の存在する尾根の全域にわたって、耕作土を重機で取り除いてから、ジョレンを使って検出作業を行いました。遺構はローム層の上面にお

いて確認されました。また測量基準点は国家座標にあわせて設置し、遺構の実測作業はこれに基づいた10m四方のグリッドを設定して行いました。

一方、遺構の存在する可能性が少ないと思われる尾根の裾部および低地部分については、重機による試し掘り（トレンチ）を適宜行い、遺構のあるなしを確かめました。

5 発掘調査の経過（抄）

平成9年5月6日 発掘調査をはじめる。

- 8月12日 県埋蔵文化財センターの小林秀夫所長、白田武正・廣瀬昭弘両調査課長が現地指導に訪れる。
- 8月22日 県教育委員会文化財保護課の原明芳指導主事が現地指導に訪れる。
- 9月4日 小豊穴360から琥珀玉が出土する。
- 9月7日 現地説明会を行う。見学者220名。
- 9月9日 琥珀玉の保存処理を県立歴史館白沢勝彦専門主事へ依頼する。
- 9月11日 富士見町教育委員会小林公明係長以下18名が現地見学へ訪れる。
- 10月3日 ラジコンヘリによる航空撮影および航空測量を実施する
- 11月4日 重機による陥し穴の断ち割り作業を始める。
- 11月17日 すべての発掘調査を終了する。

6 遺跡の位置と環境

南平遺跡は、長野県諏訪郡原村柏木区の南方に所在しています。このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられます。南平遺跡は阿久川と大早川にはさまれた尾根上にひろがっています。八ヶ岳西麓の縄文時代中期遺跡が認められる尾根としては、尾根幅はやや狭い部類にはいります。

発掘調査は今まで行われたことはありませんでしたが、昭和29年の『長野県埋蔵文化財包蔵地調査カード』に登録されており、当時にはすでに遺跡であることが明らかになっていました。昭和31年に刊行された『信濃史料』では縄文時代中期の土器、打製石斧、磨製石斧の発見を伝えています。また昭和46年度に行われた分布調査の報告書には縄文土器片と顔面把手、打製石斧、磨製石斧の出土が記載されています。この顔面把手については『原村誌』に紹介されています。また平成7年度に実施された大規模開発事業地内遺跡の詳細分布調査では縄文時代中期前半の土器などが多量に出土し、また耕作土の浅いところでは、豊穴住居址のプランを観察することができました。このように調査前の段階から、縄文時代中期前半の大規模な集落遺跡の存在が予想されました。



第1図 南平遺跡の位置と付近の遺跡 (1 : 20,000)

表1 南平遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見、◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文		弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早前中後晩							
9	比丘尼原			○				○			平成8年度範囲確認調査
11	河久		○	○	○	○		○			昭和50~54年度発掘調査
12	前沢			○				○			○昭和55・61年度発掘調査
13	長峰		○	○	○	○		○			○平成3年度発掘調査、消滅
14	裏長峰	○	○	○				○			○平成4年度発掘調査、消滅
15	程久保		○	○				○			○平成4・5年度発掘調査、消滅
17	白ヶ原			○				○			昭和52年度発掘調査
18	前尾根西			○							
19	南平		○	◎				○			平成8年度発掘調査
20	前尾根			○	○			○			○昭和44・52~54・59・平成9年度発掘調査
21	上眉沢尾根			○	○			○			○平成4年度発掘調査
22	清水		○	○	○			○			平成8年度発掘調査 沿誠
23	恩巣西	○	○	○	○			○			昭和62・平成5・6年度発掘調査
24	恩巣		○	○	○			○			昭和62年度詳細分布調査
25	裏尾根			○				○			平成8年度発掘調査
26	家下			○				○			昭和59・平成9年度発掘調査、平成5年度立会い
27	關廬沢			○				○	○		昭和62・平成9年度発掘調査
28	宮平							○			
42	眉沢尾根		○	○	○			○			昭和50・51・52・56・平成6年度発掘調査
43	中河久			○				○			○昭和61年度発掘調査
44	原山			○				○			昭和50年一部破壊
45	広原日向	○		○	○			○			昭和56年度発掘調査
46	宿尻	○			○	○		○			平成5・6年度発掘調査
47	ヲシキ		○	○	○			○			昭和51年度発掘調査
48	椎の木			○				○			昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	○				○			昭和50・平成4・5年度発掘調査
50	山の神			○	○			○			昭和54年度発掘調査
51	施ヶ原			○	○			○			昭和63・平成元年度発掘調査
52	水掛平			○				○			平成7・8年度発掘調査
53	雁頭沢			○				○			○昭和54・57・63・平成4・5・9年度発掘調査
54	宮ノ下		○	○				○	○		○昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根			○	○	○		○			○平成7年度発掘調査
56	家前尾根		○	○	○	○		○			○昭和51年一部破壊、平成7年度発掘調査
57	久保地尾根			○				○			昭和51年一部破壊、平成6・7・8年度発掘調査
58	野の木										
93	大石西			○	○						平成3年度発掘調査
95	土井平							○			平成4年度発掘調査 消滅

II 遺跡の概要

1 概 観

南平遺跡からは、竪穴式住居址27軒、小豎穴368基がみつかりました。これらは、縄文時代早期末、縄文時代中期中葉、中世末から近世初頭頃、の3つの時代・時期にわけられます。

縄文時代早期末

小豎穴333がこの時期では唯一の遺構です。これは集石を伴っており、石蒸し焼料理をした跡ではないかと考えられます。また遺構外遺物としてもこの時期の土器片が少なからずみつかっていますので、この時期に南平遺跡で何らかの生活がなされたことは確かです。

縄文時代中期中葉

南平遺跡が最も栄えた時期です。竪穴式住居址はすべてこの時期のものです。土器型式でいうところの落沢式から藤内式の3時期にわたっています。ここで時期別に分類してみると、次のようにになります。

落沢式の住居址 2軒 (4B号住、8号住)

新道式の住居址 8軒 (2号住、3B号住、6号住、7号住、9号住、10号住、14号住、24号住)

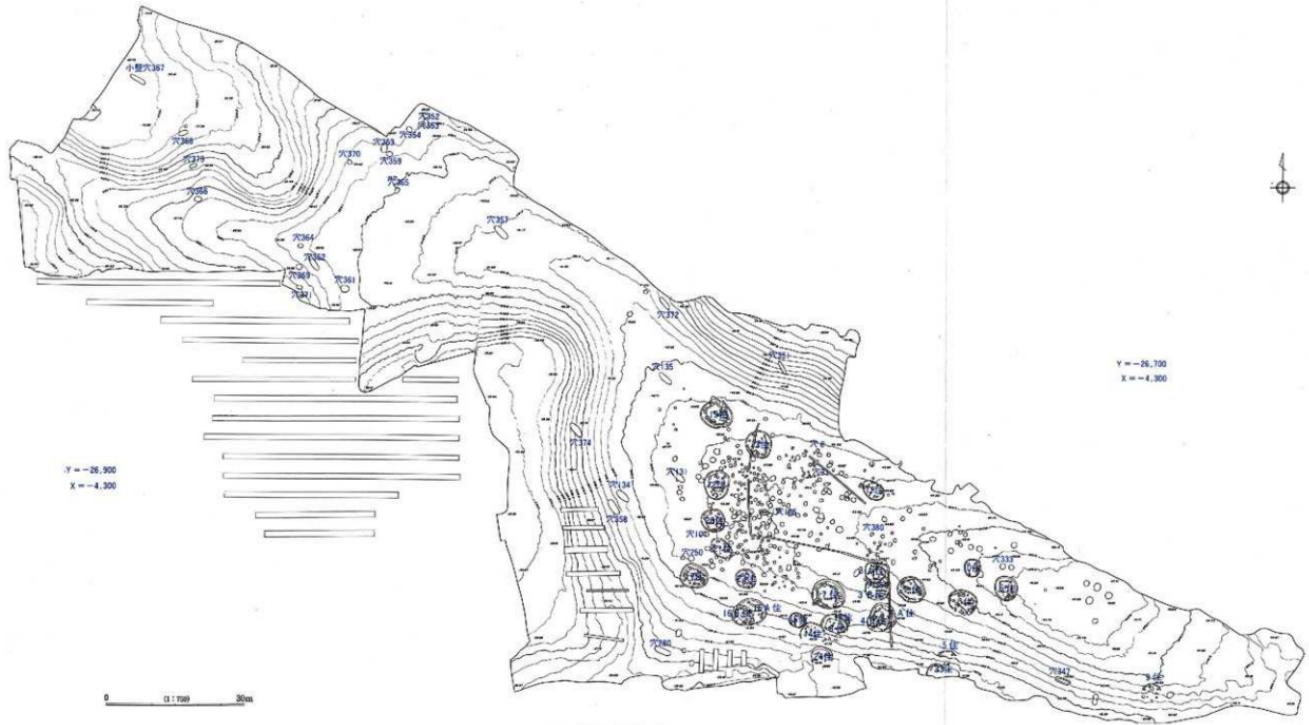
藤内式の住居址 14軒 (1号住、3A号住、4A号住、5号住、11号住、12号住、13号住、16A号住、16B号住、17号住、19号住、20号住、21号住、22号住)

時期不明の住居址 3軒 (15号住、18号住、23号住)

このように南平遺跡にみられる住居址は、新道式と藤内式の時期がその中心となっており、比較的短い期間に営まれた集落であることがわかります。また、これらの住居址群は環状にめぐっており、その内側には約200基もの小豎穴が存在しています。この時期にみられる小豎穴の用途には、陥し穴、墓穴、貯蔵穴、ゴミ捨て穴、などが想像されますが、陥し穴を除いてその用途を確定することはなかなか困難です。

中世末から近世初頭期

本書でB型陥し穴として紹介する12基がこの時期にあたります。このタイプの陥し穴は今まで一般的には縄文時代に属するものとして理解されてきましたが、今回の発掘調査での知見および放射性炭素年代測定の結果をあわせて検討した結果、この時期のものであると考えるに至りました。これらは、原村の中世・近世の歴史を知るうえで欠かすことのできない資料になると思われます。(III章3項参照) 今回の概報ではすべての遺構・遺物を紹介することはできませんので、代表的なものを選んで以下、紹介していきたいと思います。



2 発見した主な遺構と遺物

(1) 壁穴式住居址

壁穴式住居址は27軒みつかっています。ここではその中から11軒の住居址を紹介していきます。

2号住居址

長径6.18m、短径5.26mの規模を測り、東西に膨らむ橢円形を呈しています。新道式の住居址



出土した石皿（上部）と
接合できた石皿（下部）

です。中央部やや西寄りの場所には、数個程度の石を使用してつくられた「石囲炉（いしがこいろ）」と呼ばれる炉がみられました。また、床から約30cm浮いたところからは、三分の一ほどが欠損した石皿がみつかりました。ところが、この石皿と、ここから20mほど離れた場所から出土した同じく欠損した石皿片とが接合できたのです。おそらく意図的に2つに割ってから別々に廃棄したのではないかと想像されます。それが約4500年たった今、再び元通りの形になったわけです。



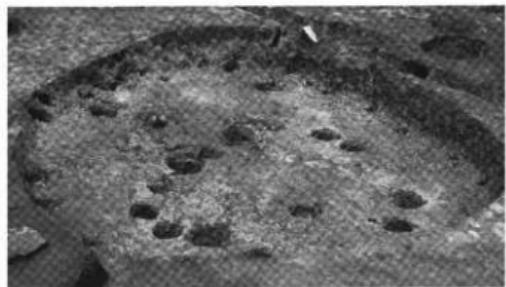
3A号住居址・3B号住居址

長径4.68m、短径4.03mの規模を計り、やや東西に膨らむ梢円形を呈する3A号住居址は、3B号住居址および小竪穴360と重なり合っていました。これらは、3B号住居址（新道式）→小竪穴

360（新道式）→3A号住居址（藤内式）の順につくられたことがわかりました。土器の出土数はそれほど多くありませんでしたが、石開炉近くにやや小ぶりな土器が2個体出土しています。これらは第4図-1・2に掲載してあります。



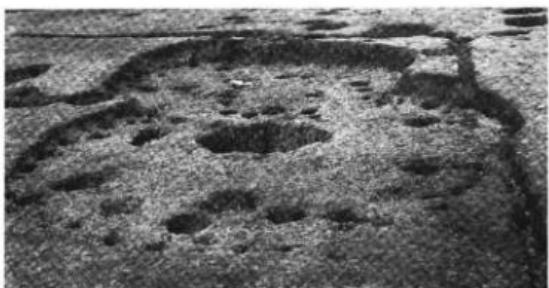
3A号住　土器出土状態



3A号住　完掘状態

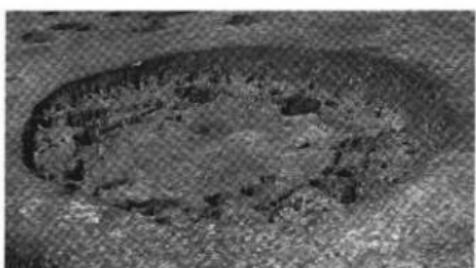
3B号住居址は、径5.5mのほぼ円形を呈しています。炉は土器を用いた埋甕炉（まいようろ）ですが、小竪穴360に壊されており、炉に用いた土器はわずかな土器片しか残っていませんでした。しかし、埋甕炉から石開炉へと移り変っていく過程が順を追ってたどれる住居址です。

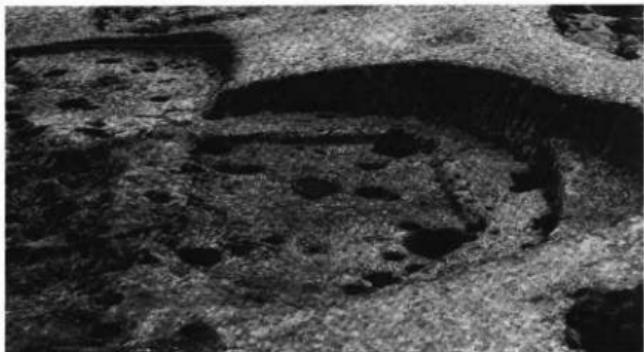
3A号住（奥）
3B号住（手前）
完掘状態





長径7.36m、短径6.32mという南平遺跡で最大の規模を測る住居址です。東西方向に膨らむ橢円形を呈しています。土器、石器などの遺物が大量に出土しました。出土した土器の一部は第4図-3～6と第5図-7に掲載しておきました。新道式の時期にあたります。また黒曜石の原石および剝片も多くみられ、総量を計測したところ約1.5kgにも及びました。炉は原形をとどめていますでしたが、石臼炉であった可能性が高く、おそらく、住居廃絶後に石を抜き取ったのではないかと思われます。

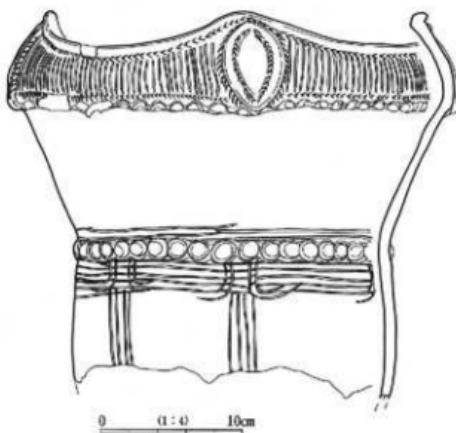




長径5.90m、短径は南側が削平されていますが推定約5mほどの規模を測り、東西にやや膨らむ橢円形を呈する住居址です。14号住居址と重なり合っていますが、14号住居址よりも古い時期のものです。中央部のやや西寄りの場所に「埋壠炉（まいようろ）」と呼ばれる、土器を使用した炉が発見されています。猪沢式期の土器です。この住居址は床が2段になっており、主柱穴をつないだ内側部分が一段低くなっています。そしてその内側の床はきれいな五角形を呈しています。炉もこの内側の低い段にありますから、おそらく主にはこの内側部分で生活していたのでしょう。



炉として使われた土器



第3図 炉として使われた土器

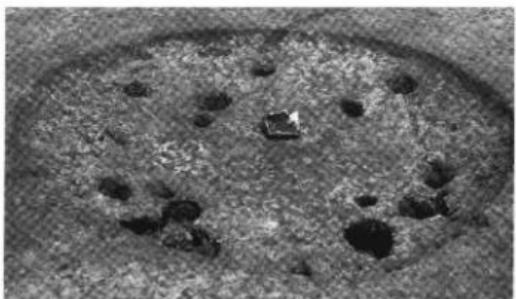
長径3.88m、短径3.54mの規模を測り、やや不整の円形を呈しています。4本の主柱で支えられた住居址と考えられます。このうち2本には建て直した痕跡が残っています。中央部やや北寄りの場所に埋焼炉がみられます。炉として用いられた土器は新道式の時期のものです。また、炉から1mほど西側には床面にしっかりと据えつけた平たい石がみられます。これはおそらく台石として使われたものではないかと想像されます。



巨大な石匙の出土状態

長径6.06m、短径5.54mの規模を測る、南北にやや膨らむ楕円形の住居址です。中央部やや北側に石閉炉がみられます。土器の出土はそれほど多くありませんが、藤内式の時期にあたります。ところで今回の調査では、住居址の写真撮影・実測図作成等の調査を済ませた段階で、各住居址の床を10cmほど掘り下げる試みを行いました。本住居址でもこの作業を実施したところ、炉の北

側30cmほどの床下から、幅が約20cm、重さが約600gもある巨大な石匙が発見されました。床下に埋めてあることやあまりにも巨大で実用品とは考えにくいものであるため、何らかの信仰に関係するものではないかと考えられます。第19図-1に掲載してあります。



15号住居址

規模は長径3.67m、短径3.05mという南平遺跡で一番小さな住居址です。平面形は梢円形を呈しています。最小の住居址とはいえ、石圓炉も柱穴もしっかりと備わっています。しかもこの住居址からは原村では今までに数点しか出土例のない土偶が発見されました。土偶とは土でつくった人形のことですが、完全な形で出土する例は珍しく、多くの場合どこかしらは欠損しています。(完全な形で発見された茅野市棚畠遺跡出土の国宝「縄文のビーナス」はその珍しい例です。) この土偶も頭部が欠損しており、発見されたものは首から下の胴体部(および脚部)を表現していると考えられます。土偶は床から約10cm浮いたところから出土しています。この住居址からは土器がほとんど出土しなかったため、時期は不明ですが、縄文時代中期中葉頃と考えてよいでしょう。

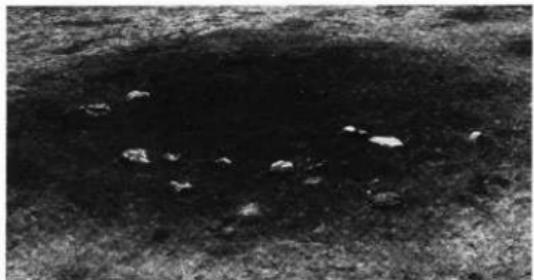


出土した土偶(2:3)



住居址の東寄りのところから土偶が出土しました

17号住居址



検出状態(黒い部分が住居址)



遺物出土状態



完掘状態

長径5.87m、短径5.12mの東西方向に膨らむ梢円形を呈し、ほぼ中央部に石圓炉があります。遺物の出土量は多く、その大部分は住居廃絶後に廃棄されたものと考えられます。中央部やや西寄りに石圓炉がみられています。藤内式の時期にあたります。第6図-10に掲載してある土器は本住居址から出土したものです。



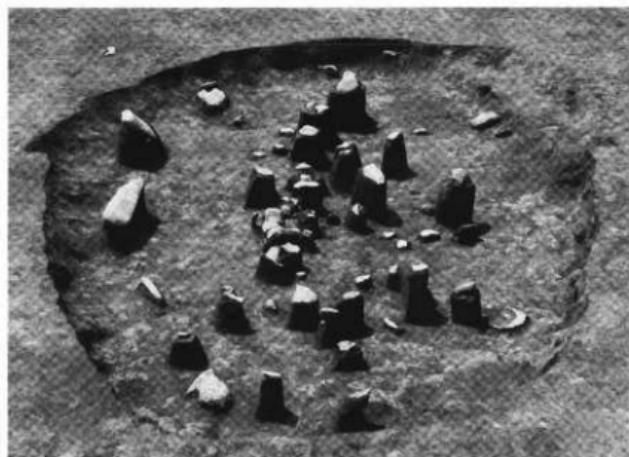
長径6.64m、短径5.85mの規模を測り、東西に長い橢円形を呈しています。北側の一部は搅乱によって壊されています。中央部やや西寄りの場所に石囲炉がみられます。この住居址も遺物の出土量は多いのですが、その大半は17号住居址と同様に住居廃絶後



右上写真の土器を復元したものです



に投棄されたものと思われます。藤内式に位置づけられます。

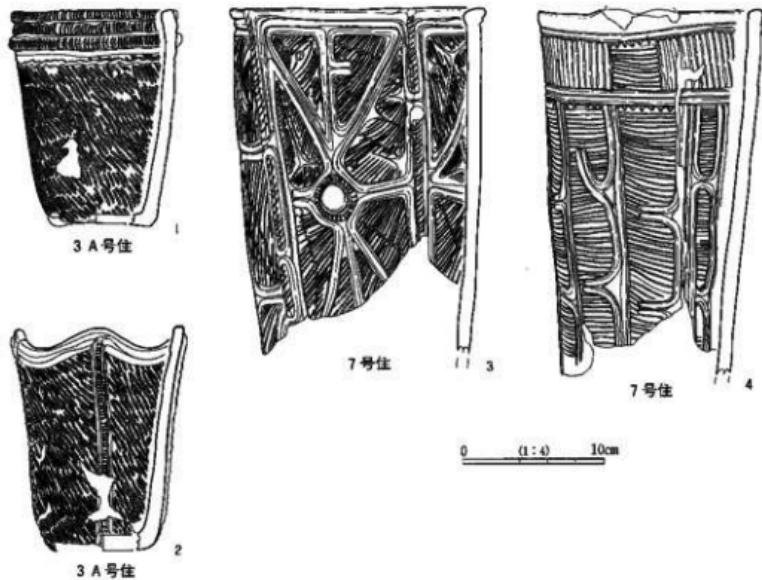


長径5.29m、短径3.30mの東西に長い梢円形を呈する住居址です。藤内式の時期にあたります。炉は石壠炉であった可能性が高いの

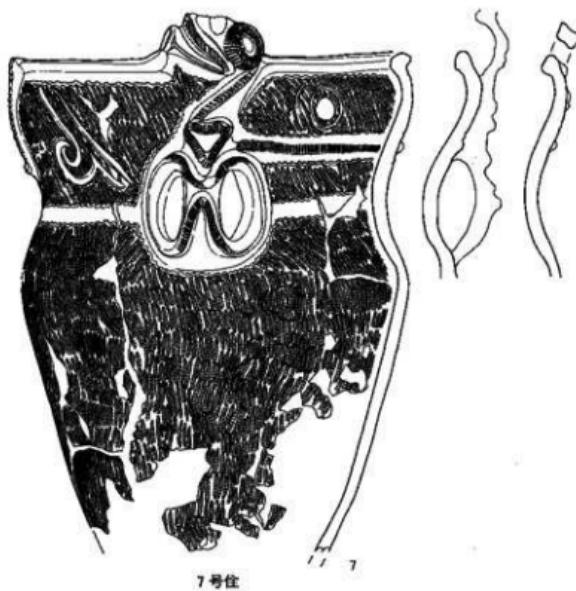


ですが、炉石は残っていませんでしたので、住居廃絶後に抜き取ったのではないかと想像されます。写真的土器は、ほぼ中央部の床に密着した状態で出土したものです。

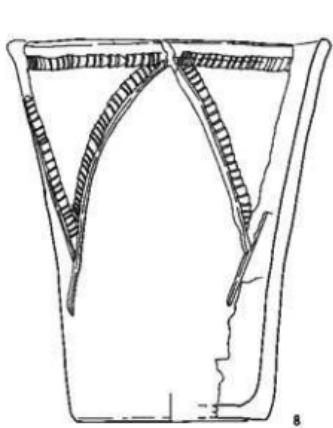




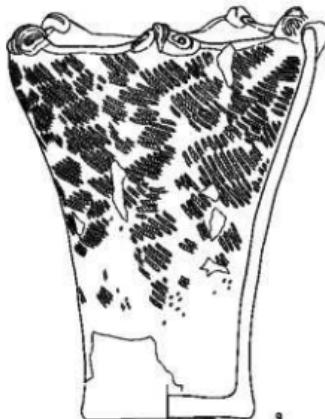
第4図 住居址出土の土器（1）



7号住



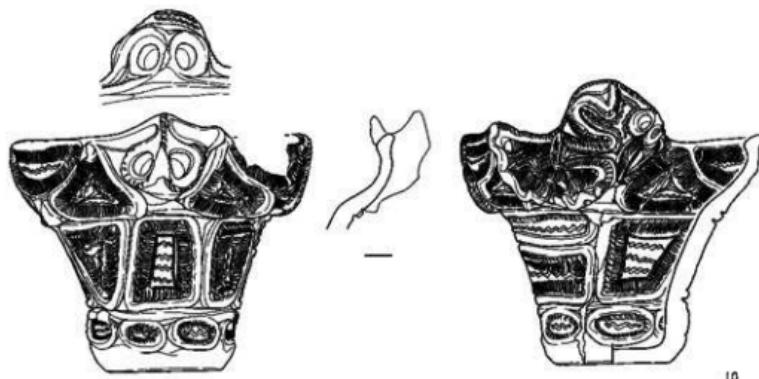
8号住



8号住

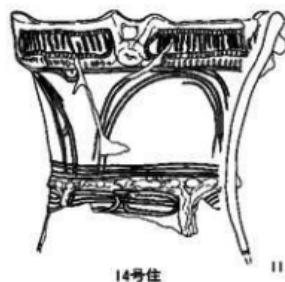
0 (1:4) 10cm

第5図 住居址出土の土器 (2)



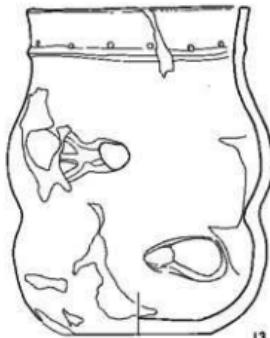
17号住

10



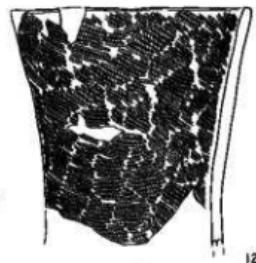
14号住

11



22号住

13



20号住

12

0 (1 : 4) 10cm

第6図 住居址出土の土器 (3)

(2) 小 穴

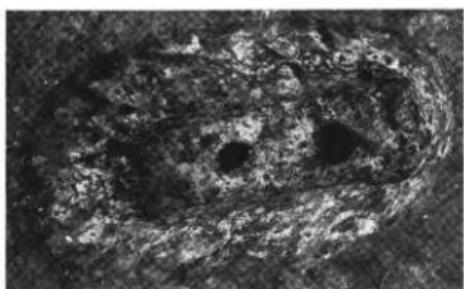
小穴というのは、人間が掘った穴のことです。土坑（どこう）とも呼ばれます。穴を掘る目的は現在でも様々ですが、これは遺跡から出土する小穴についても同様です。小穴として考えられるものには、亡くなった人を埋める墓、食料などをしまっておく貯蔵穴、動物を捕まえるための陥し穴、ゴミを捨てる穴、などがあげられるでしょう。しかしながらその用途を特定することは容易ではありません。ここでは注目される小穴を紹介していきます。

動物を捕まえるための小穴

陥し穴

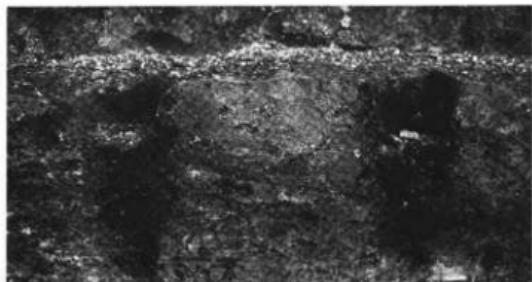
南平遺跡からは26基の陥し穴が発見されました。このうち2基を除く陥し穴には、底に逆茂木（さかもぎ）と呼ばれる棒を立てた跡が認められています。この逆茂木の設置の仕方によって2

つのタイプにわけることができます。つまり、逆茂木を「打ち込む」タイプと「埋め込む」タイプです。写真を見ていただければその違いがはっきりすると思います。このうち「打ち込む」タイプの陥し穴は中世末～近世初頭頃、つまり織田信長や豊臣秀吉が活躍していた頃のものであることが今回の調査でわかりました。また、この「打ち込む」タイプの陥

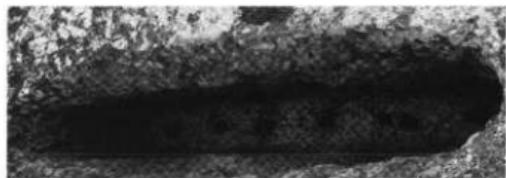


埋め込むタイプ (小穴368)

し穴では逆茂木をかけやの類で打ち込まなければならぬので、おそらくその上端部は尖っていたとは考えられません。そうした違いを理解していただくために、イラストを作成してみました。(III章3項参照)



埋め込むタイプ (小穴368)



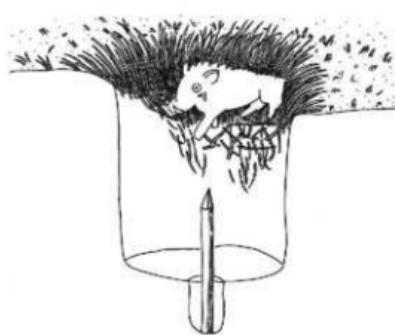
打ち込むタイプ (小野穴372)



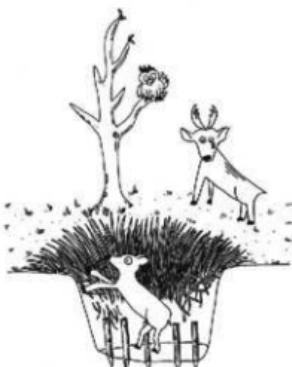
打ち込むタイプ (小野穴374)



打ち込むタイプ (小野穴135)



埋め込むタイプ (A型)



打ち込むタイプ (B型)

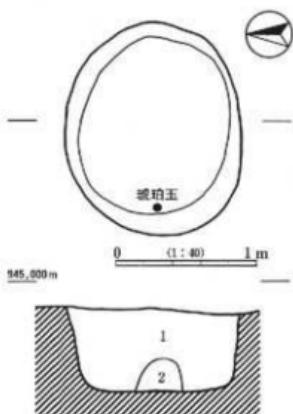
第7図 陥し穴の復元図 (小林りえ画)

銚子からきた？琥珀玉

原村の土壤では酸性が強いため、縄文時代の人骨は溶けてしまいほとんど残りません。そのため墓であるかどうかの判断は難しいのですが、小堅穴360（長径152cm、短径124cm、新道式）からは埋葬された人が身につけていたと思われる琥珀玉が底面から出土していますので、墓ではないかと想像されます。おそらくはひもを通して首にかけていたのでしょう。なお、この琥珀玉

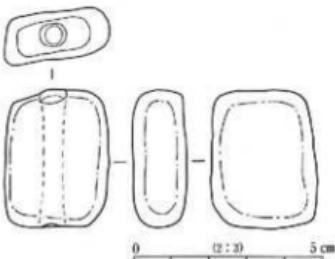


3A号住、3B号住と
重なり合っています



1. 砂褐色土上にロームブロックが多く含まれる
2. 砂褐色土・ロームブロックは含まれない

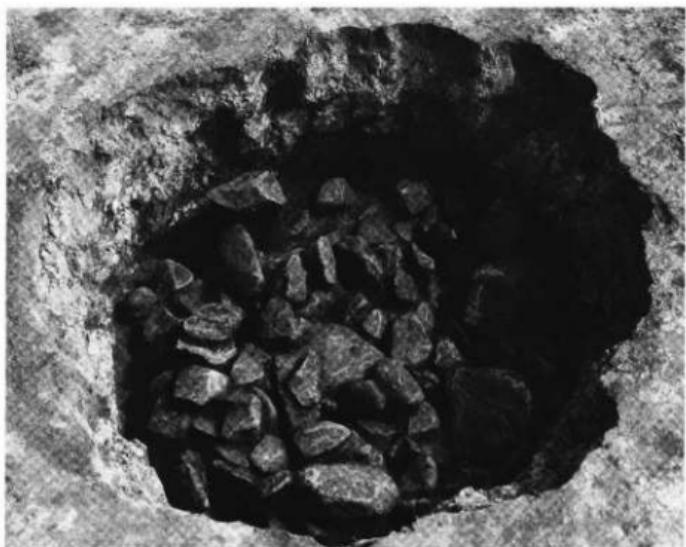
（縦36mm、横28mm、厚14mm）は産地同定分析を行いました。（III章5項参照）その結果、産地を完全に限定することはできなかったものの、千葉県銚子産の琥珀に似ているとの鑑定結果が得られました。



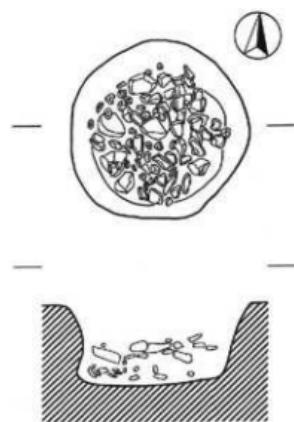
第8図 小堅穴360および同出土の琥珀玉

集石を伴う小堅穴

縄文時代の調理場



縄文時代早期末の小堅穴333は、径125cmのほぼ円形を呈していますが、拳大から手のひらほどまでの大小さまざまな200ヶ近くの石がぎっしりとつまつた状態で出土しました。これらの石の中には火を受けた痕跡の残っているものも少なくありませんでした。また炭化物もわずかながらみつかっています。こうしたことから考えると、おそらく現在でもポリネシアなどにられる石蒸し焼き料理を行った跡ではないかと考えられます。いわば縄文時代の調理場の跡というわけです。ここから出土した土器については、III章1項で詳細な考察がなされています。



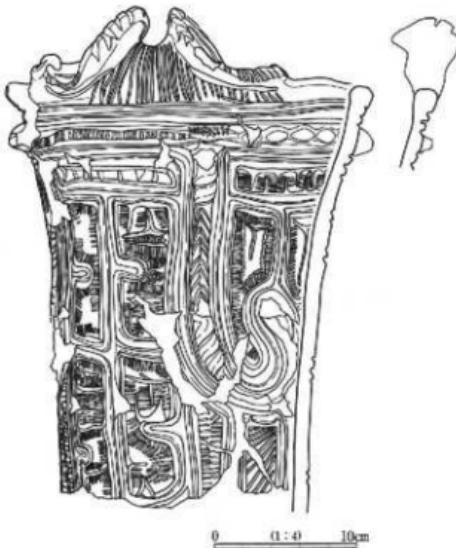
第9図 小堅穴333

完形土器が出土した小竪穴(II) —————

そこに気がつかなかった！



小竪穴8からは、ほぼ完全な形の土器（藤内式）が発見されました。長径87cm、短径52cmの不整形を呈する小竪穴ですが、出土状況から考えますと意識的に埋めたものではないかと想像できます。このように見事な土器をなぜ埋めてしまったのでしょうか。しかも気になるのは、この土器は底がありません。わざと底を抜いて埋めたようです。いったい何の目的で底を抜いたのでしょうか。



第10図 小竪穴8出土土器

完形土器が出土した小竪穴(2)

縄文時代のリサイクル

小竪穴185（長径推定80cm、短径75cm）からもほぼ完全な形の土器が発見されました。この場合は横たえた状態で出土しています。さて、この土器で興味深いのは、土器に2つの穴があけられていることです。これは割れてしまった土器を、ひもでつなぎ合わせるためにあけたものだと

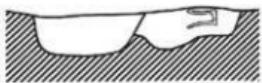
考えられます。こうした穴を考古学では「補修孔」と呼んでいます。割れた土器を何とか直そうという縄文人の知恵がしのばれます。



出土した補修孔のある土器



944-30m



0 (1:40) 1m

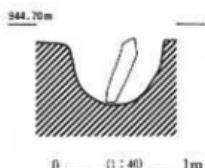
第11図 小竪穴184(左)、185(右)



立石が出土した小豈穴

埋められた立石の謎

小豈穴380は、長径79cm、短径59cmを計る不整形の小豈穴ですが、立石がまるで大地に突き刺すかのような状態で埋められていました。立石というのは、石棒とは異なりほとんど加工のない角柱の石のことですが、何らかの信仰に関係する遺物だと考えられています。石棒は男性のシンボルをあらわしているとの見方がありますが、この立石も同じような意味をもっているのでしょうか。なぜ埋められていたのかも不思議なことです。なお、八ヶ岳山麓で石棒が一般的にみられるようになるのは、もう少し後の時期になってからです。



第12図 小豈穴380



出土した立石

石皿が出土した小豈穴

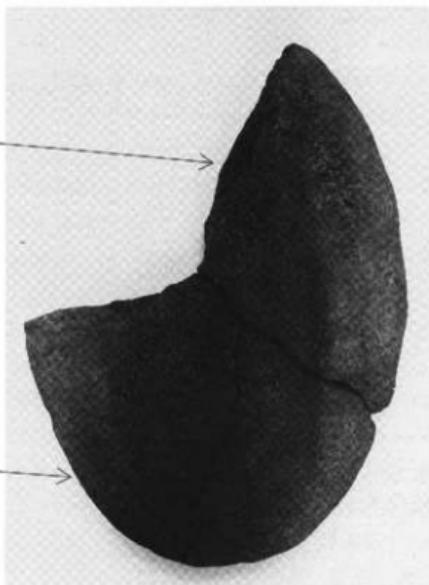
再び巡り会えた 2 つの石皿



小豈穴31 出土の石皿

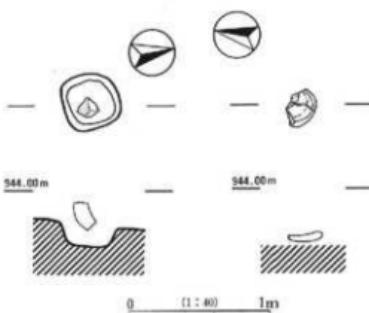


小豈穴101 出土の石皿



接合された石皿

小豈穴31（長径41cm、短径40cm）からは割れた石皿が出土しました。また小豈穴101は掘り込みは確認できませんでしたが、ここからも割れた石皿がみつかりました。そしてこの2つの石皿は、約30mも離れているのになんと接合することができたのです。おそらく、1つの石皿を意図的に割って、いくつかにわけて埋めたのでしょう。なぜそのようなことをしたのかはよくわかりませんが縄文人の思考に迫る糸口になるかもしれません。



第13図 小豈穴31（左）および小豈穴101（右）

III 特 報

1 縄文時代早期末の土器

川崎 保

小堅穴333出土土器（第14図-1～5、第15図-6～9）

貝殻条痕文土器（第14図-1～5）

いずれも内外面に条痕が施されている。これらの条痕はいずれも幅3～4mm前後で、中には条痕のなかに細密な条線が残るものがあり、条痕の断面が角ばっていることから貝殻条痕とした。外面には口縁に並行するようにヘラ状工具によるやや斜位の刻み目が1段ないし2段、口唇端部には交差刻み目が連続して施されている。いずれも波状口縁。

絡条体圧痕文土器（第15図-6～8）

いずれも内外面に条痕が施されているが、6・8の条痕の幅は3～4mm、7の条痕の幅は2～3mmと一様ではない。しかも条痕の断面がかまぼこ状のゆるやかな湾曲した形を呈している。6の土器は口縁に並行する低く緩やかな隆帯を貼付し、その隆帯上を絡条体で鋸歯状に押圧している。隆帯と口縁の間および内面は横位の条痕。7は内外面とも斜位の条痕が施されているが、外面右下に絡条体の圧痕が残る。8は内面は斜位の条痕が施されるが、外面には斜位の絡条体の圧痕が見られる。先述の条痕の特徴およびいずれも一部に絡条体が用いられているので、このタイプの条痕を絡条体条痕と判断した。

無文土器（第15図-9）

内外面とも丁寧にナデられている。口縁は緩やかな波状を呈し、胎土に繊維を含むことから当該期に属するものと判断した。

遺構外などから出土した土器（第16図-10～19）

貝殻条痕文土器（第16図-10～14、16、19）

10～13は内外面と口唇端部に刻みをもつ。10は刻みの中にぎざぎざが認められることから他の土器のようなヘラ状工具ではなく貝殻を短冊状にしたもので施したのだろう。なお、10の器面自体は丁寧にナデされており条痕はほとんど見られない。

絡条体圧痕文・条痕文土器（第16図-15、17、18）

15は外面に緩位の絡条体圧痕、内面も絡条体の条痕が施されている。17はかすかに、18はかなりはっきり内外面に絡条体条痕が施される。

小 結

小堅穴333の波状口縁で貝殻条痕を地とし、口唇端部あるいは口縁に並行して連続した刻みが

施された土器はいずれも東海系条痕文土器の舶畳式に比定されよう。また、共伴して出土した絡条体圧痕文・条痕文土器は特徴に乏しい土器ではあるが、近年編年的位置付けについての研究がいくつか発表されている。これらの研究によると舶畳式と共伴する例は少なくないと言うが、小豎穴333では舶畳式が比較的まとまって出土しており、当該期の編年研究上、良好な一括資料である。小豎穴333の絡条体圧痕文土器（第15図-6）は口縁に並行する低い隆帯をもつが、この隆帯によって区画された文様帶の幅は比較的広く、隆帯上に絡条体が鋸歯状に押圧される特徴が見られ、舶畳式が共伴したという茅野市高風呂遺跡39号住居址と同段階だろう。貝殻条痕文土器は第16図-10のように内外面とも丁寧なナデが施され、条痕が見られないものや第14図-1～5、第16図-11～12のように内面の貝殻条痕は明確であるのに、外面の条痕はやや浅く、器面も平滑に仕上げられている特徴がある。

遺構外などからも、早期末に位置づけられる土器が出土している。絡条体圧痕文土器の良好な資料は多くないが、舶畳式の浅い受口状になる波状口縁の突起（第16図-11・12）が出土しており、これらの資料も小豎穴333の資料とほぼ同時期の所産と考えて良いだろう。

混和材の観察からは、これら早期末の土器群には纖維が含まれている点では両者に大差無いが、舶畳式の土器には長石はほとんど含まれないのに対し（その分岩片かと思われる白色粒子が散見される）、絡条体圧痕文土器には南平遺跡の中期の在地系土器と同様に多くの長石を含むことが認められた。これは高風呂遺跡報告書にても両者の混和材の差異は指摘されていて、興味深い。また、早期末の土器群の中での相対的な対比にしか過ぎないが、土器の硬さは貝殻条痕文土器は比較的硬く、絡条体圧痕文土器は前者に比べ軟質であるという結果も出た。混和材や土器の硬軟といった属性が土器の型式学的な分類に比較的うまく対応している。

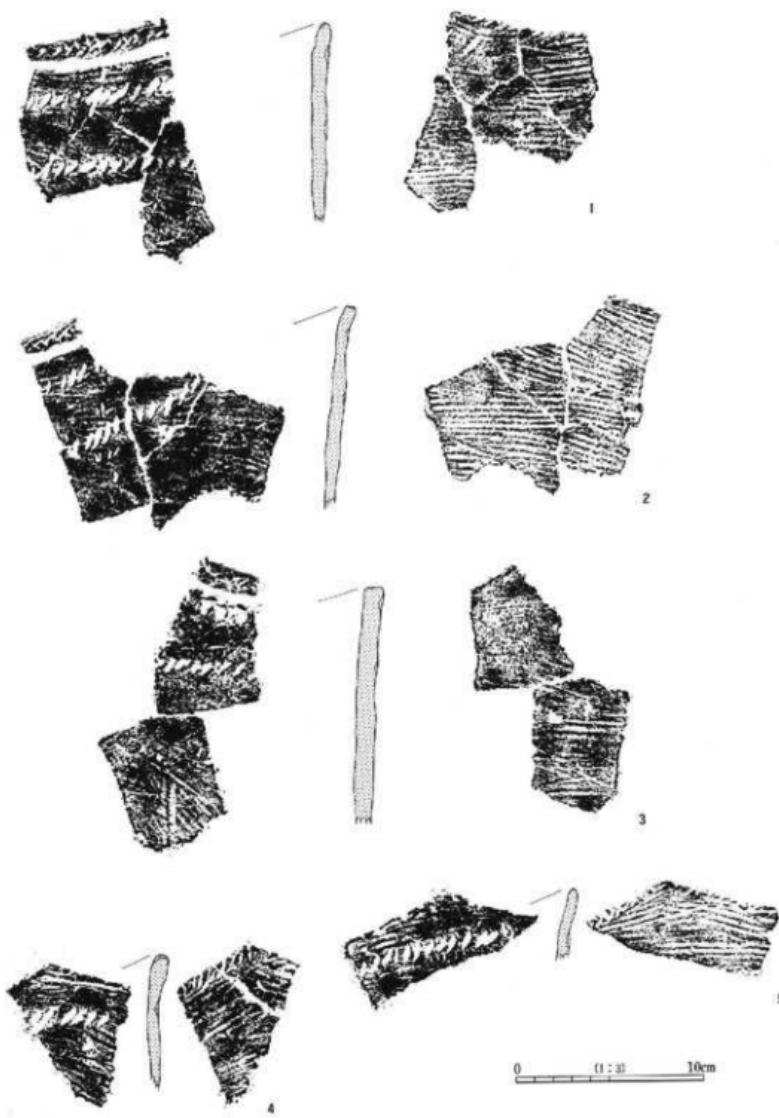
引用参考文献

- 守矢昌文・鵜飼幸雄ほか「高風呂遺跡」茅野市教育委員会
綿田弘実1993「第II群早期末葉の土器群」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12-東筑
摩郡坂北村・麻績村-向六工遺跡ほか」(財)長野県埋蔵文化財センター
中沢道彦・賀田 明1996「長野県北佐久郡御代田町灰場遺跡採集の縄文土器について」『縄文時代』

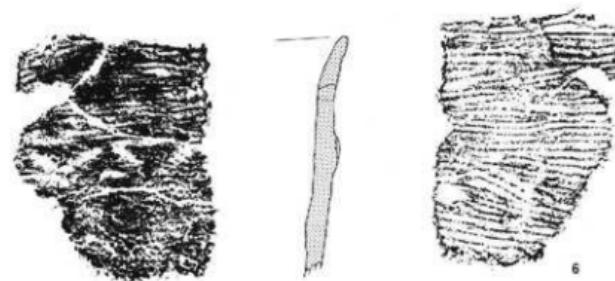
表2 土器観察表

色調は「標準土色帖」に基づく。色相(Hue)は省略した。混和材はスケール付ルーペ(8倍)による非破壊的肉眼観察で、痕跡は目立つ顕に記入した。焼成は土器の硬軟をこの土器群の中での相対的な比較を負し、並、歯の3段階に分類している。また調整施文技法にある条痕(貝)とはハイガイなどの殺虫が段状に発達した斧足脚(二枚目)のフネガイ目(Arcoida)の仲間の貝殻を用いた条痕で、条痕(筋)は結条体条痕のことである。

図 番 号	出土地点	部位	色 調	混和材	焼 成	調整施文技法	備 考
1	SK333	口縁	灰褐色	径0.5ミリ以下石英、鐵維	良	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ヨコ条痕(貝)	口唇交差ヘラ刻み
2	SK333	口縁	褐色	径0.5ミリ位石英、鐵維	良	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ヨコ条痕(貝)	口唇交差ヘラ刻み
3	SK333	口縁	にぼい黄褐色	径0.4ミリ位石英、鐵維	良	外) ナナメ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ヨコ条痕(貝)	口唇交差ヘラ刻み 口縁部外面スス付着
4	SK333	口縁	褐色	径0.5ミリ位石英、鐵維	良	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ヨコ条痕(貝)	口唇斜めヘラ刻み
5	SK333	口縁	にぼい赤褐色	径0.5ミリ以下石英、鐵維	良	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ヨコ条痕(貝)	口唇交差ヘラ刻みと斜め ヘラ刻み。4と同一個体
6	SK333	口縁	橙色	径0.5ミリ位長石、石英、 鐵維	軟	外) ヨコ条痕(筋)、壁帯鉛垂伏筋压痕 内) ヨコ条痕(筋)	補修孔あり。小波状? 口縁部外面スス付着
7	SK333	胴	明赤褐色	径0.5ミリ位長石、石英、 鐵維	並	外) ナナメ条痕(筋) 内) ナナメ条痕(筋)	外面に一部結条体压痕あり
8	SK333	胴	明赤褐色	径0.5ミリ位長石、石英、 鐵維、砂(チャート?)	軟	外) ヨコ条痕(筋)→ナナメ結条体压痕 内) ナナメ条痕(筋)	
9	SK333	口縁	黒褐色	径0.5ミリ以下石英、長 石、鐵維	並	外) 丁寧なヨコナデ 内) ナデ、多少凹凸あり	
10	ST375	口縁	にぼい黄褐色	径0.5ミリ位石英、鐵維	良	外) ナデ→刻み 内) ナデ→刻み	口唇刻み。刻みの原体は いずれも貝殻か
11	遺構外	口縁	にぼい黄褐色	径1ミリ位石英、鐵維	並	外) ヨコ条痕(貝)→ヘラ刻み 内) ナナメ条痕(貝)→ヘラ刻み	口唇2列ヘラ刻み
12	遺構外	口縁	にぼい橙色	径1ミリ位石英、鐵維	良	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ナナメ条痕(貝)	口唇2列ヘラ刻み
13	遺構外	口縁	橙色	径0.5ミリ位石英、鐵維	軟	外) ヨコ条痕(貝)→ナデ、ヘラ刻み 内) ナデか	口唇ヘラ刻み
14	遺構外	口縁	にぼい黄褐色	径0.5ミリ位石英、鐵維	並	外) ヨコ条痕(貝) 内) ヨコ条痕(貝)	口唇ヘラ刻み
15	遺構外	口縁	にぼい褐色	径0.5ミリ位長石、石英、 鐵維	並	外) タテ結条体压痕 内) ナナメ条痕(筋)	
16	遺構外	口縁	にぼい褐色	径1ミリ位石英、鐵維	並	外) ナナメ条痕(貝) 内) ナナメ条痕(貝)	口唇ヘラ刻み
17	遺構外	胴	にぼい橙色	径0.5ミリ以下石英、長 石、鐵維	並	外) 条痕(筋)→ナデ 内) ヨコ条痕(筋)	口唇ヘラ刻み
18	遺構外	胴	橙色	径0.5ミリ以下石英、長 石、鐵維	並	外) ヨコ条痕(筋)→ナデ 内) ナナメ条痕(筋)	口唇ヘラ刻み
19	遺構外	胴	にぼい橙色	径0.5ミリ位石英、鐵維	並	外) ヨコ条痕→ナデ 内) ナナメ条痕(貝)	



第14図 小竪穴333出土 縄文時代早期末の土器（1）



6

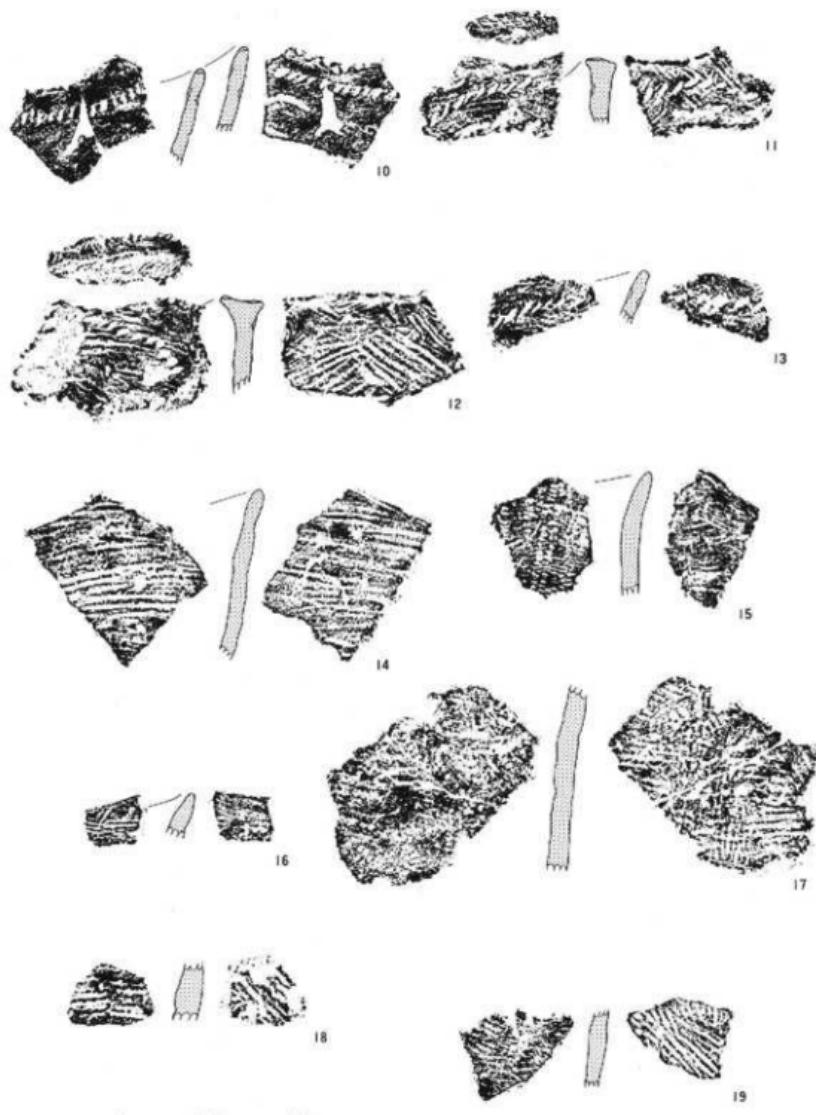
7

8

9

0 1 : 33 10cm

第15図 小堅穴333出土 縄文時代早期末の土器（2）



第16図 遺構に伴わない縄文時代早期末の土器

2 南平遺跡の石器

角張 淳一

(1) 石器の概要

南平遺跡の石器は大きく3種類に分類される。黒曜石を主にする小形石器、緑色岩・硬質砂岩を主にする打製石斧・尖頭器・削器類、安山岩を主にする磨石・石皿である。

このうち黒曜石の石器類は遺跡内の膨大な剝片類、子どもの拳程度の原石などが残され、遺跡内で製作作業が行われている。緑色岩・硬質砂岩の石器類は遺跡に膨大な破損品が残され、多量の消費が推定できる。また小形石器は黒曜石が圧倒的で珪岩その他の石材はほとんど見あたらぬ。第19図8に掲載したが赤珪岩の石匙は特に異質である。

遺跡に残されている器種を説明する。黒曜石を主にする小形石器は石鏃、石錐、使用痕の付く剝片、簡単な二次加工をした剝片製の削器類である。石鏃は形態のわかるものは105点出土し、このうち遺構出土のものは、今回全て図化してある。

緑色岩・硬質砂岩の器種は大きく6種類に分類できる。分類の概要は図とともに説明するので器種名だけあげると、尖頭器、横形石匙、縦形石匙、削器、打製石斧、ヘラ状石器である。このうち尖頭器には3種類、横形石匙に3種類、削器に4種類、磨製石斧に3種類の作り分けられた石器の種類がみられる。磨斧を除くこれらの完形品は250点強ある。

磨製石斧は40点強出土しているが、形態のわかるものは9点すべて図化した。

從来縄文時代の石器は、形態の類似性で石器の種類を決めつけられてきたが、石器の製作技法を分析することで、かなり多様な内容をもつ石器群であることが、今回提示できることと思う。この多様さは単なる機能の種類の多さとはいえないようである。伝統的な石器製作技法に別の文化からの影響をうけて石器製作技法が変化している場合も考えられる。いずれにしろ縄文時代の石器研究は石器の製作技法を明らかにして、製作者によって區別された石器の種類を遺跡毎に提示していく基礎作業が要求されよう。今回の南平遺跡の石器組成は從来の知見とは若干異なる縄文時代中期の石器群のあり方を提示できると思う。

(2) 図の説明

第17図：石鏃

図には遺構内の石鏃で形態のわかるものは全て掲載した。掲載は遺構ごとであり、土器の時期に従って並べてある。類似した形態のものも多く観察できるが、その整理と分類は今後の課題である。

第18図：尖頭器

尖頭部の形成された石器をここに掲載した。1～5までは側辺に短い鋸歯状の剝離の付く尖頭器である。1は特に完成されている。2は基部が破損、3は先端がゆるやかに尖頭形で鋸歯状の剝離が付いている。4は3の尖ったもの。5は小形の尖頭器で基部が厚い。6は傘の開く形態の尖頭器である。7～11・13は通常は石匙として分類されている石器である。石匙は從来つまみの付いた削器の理解であるが、それに該当する石器もこの遺跡は別にある。ここにあげた石器は、一様に両側辺を通常の剝離で成形するとともに、その側辺の交わりは明らかに尖頭部を形成している。この石器は尖頭部を意識的に製作された石器であることに注意すべきであろう。ここでは、この種類の石器をつまみのついた尖頭器としておく。私たちがイメージする削器としての石匙とは区別するべき石器だろう。12は大形の尖頭器。薄い素材の側辺にハンマーを縁にひっかけるような剝離で成形している。13は右側辺に磨滅痕がある。横形石匙としてもよいが、尖頭部を形成するのでここに掲載した。

第19図：横形石匙

1は超大形の横形石匙である。この石匙のみ縮尺を変えてある。裏面は磨痕で覆われており、刃部には使用痕がみられる。摘みは刃溝し加工で成形されている。2～7は形態に一定性のみられる横形石匙である。8は赤珪岩の横形石匙、もしくは尖頭器の可能性がある。加工はすべて押圧剝離で他の石器とは加工技術も異なる。このような石器は石材の色・技術・形態に注意すべきであろう。この文化に特別の石器の可能性もある。

第20図：縦形削器類

1から3までは縦形石匙である。すべて右側辺を刃部とし左側辺は刃溝し加工がある。4から11までは多様な形態の縦形削器である。特に打製石斧に類似する形態があることに注意すべきである。刃部が区別されて作られているにもかかわらず、形態が類似することの技法の構造が重要であり、石器製作技法が石器の機能を実現するだけで成立っているというものの見方に警鐘を与える。図の↑の記号は刃溝し加工である。従ってそこは刃部にはならない。また←の記号は刃溝し加工以外の加工を示す。こうして石器を辺に分解して観察すると、縦形削器としてここに掲載した石器には、形態の短い辺に加工のつく石器がないことがわかる。この種類の石器は原則として素材の側辺をそのまま刃部に加工することはないので、おそらく側辺が刃部であろう。11は例外的に短い辺に加工が付いている。この辺を刃部とすれば、左側辺の刃溝し加工に対する右側辺の剝離による加工は単なる成形であろうか。連続する剝離による刃部をもつ削器として理解しておこう。

第21図：縦形削器類

1は右側刃に鋸齒状の刃部をもつ削器である。2はかなり顕著な刃部をもつ鋸齒状削器である。3と4は右側刃の手前から真中にかけて連続する剝離で刃部を形成する削器である。右側刃の向こうは刃済し加工、左側刃は短い加工による成形である。5と6は中形以上の削器。薄い素材に丁寧な剝離で刃部を形成している。

第22図：削器と打製石斧

1は礫素材の削器。分厚く頑丈な刃部を右側刃につくっている。2と3は円礫をそのまま打ち欠いた剥片（礫端片）を素材に、その長い側刃の裏面に加工し、背面の滑らかな自然面をそのまま利用した削器である。

以上が削器類の技法上・形態上の変異である。これらはさらに分離されたり、統合されたりする可能性をもつが、今回は記述にとどめた。

4から7は打製石斧である。4、5、6は抉りのある形態である。刃部は短い剝離を表裏から行い、素材の厚みをともなう頑丈な刃部となっている。7は短冊形態の打製石斧。

第23図：打製石斧、ヘラ状石器、磨製石斧

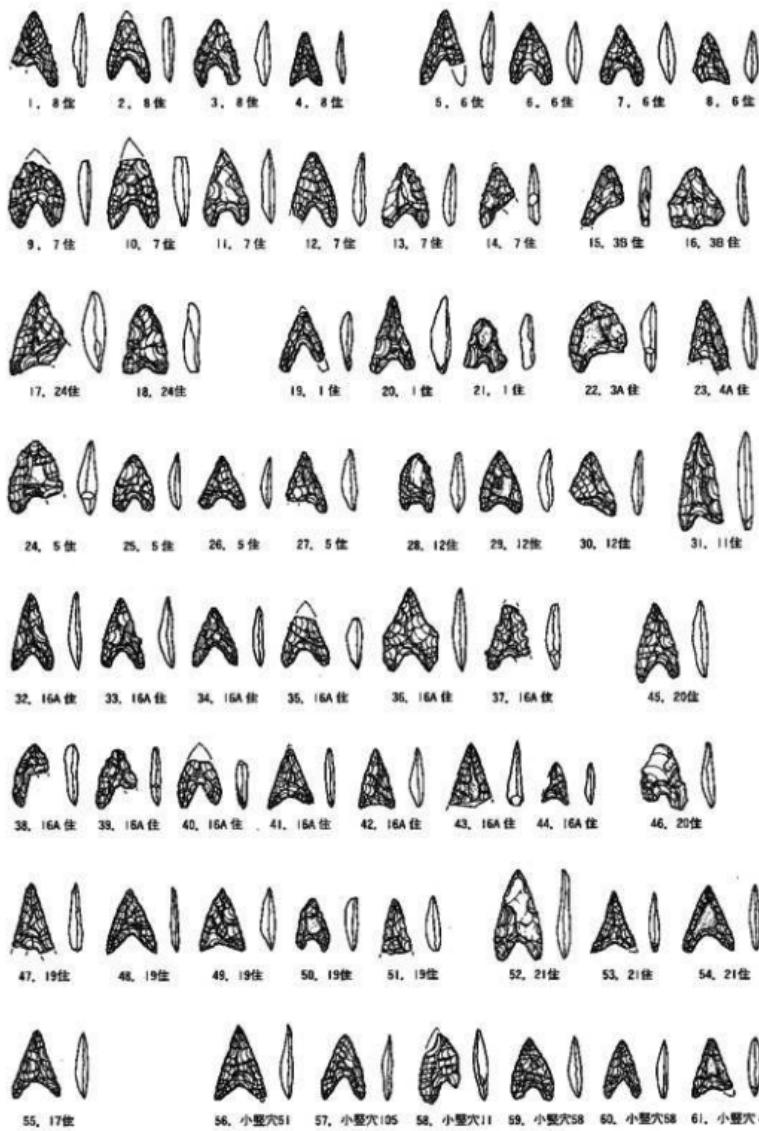
1は中形の打製石斧。側刃は刃済し加工と素材の折れ面を残して刃部にならない。手前の短い刃に打製石斧の刃部の加工がみられる。2から4までは通常の大きさの打製石斧。1と同じように基部を尖らせる3、基部の平面形態が平らな2と4がある。

5と6はヘラ状石器。素材、刃部が薄く打製石斧とは区別される石器である。二次加工も刃済し加工ではなく、薄い素材の縁辺にハンマーを引っかけるような剝離であり、むしろ尖頭器に近い成形加工の剝離である。刃部は手前の短い刃に形成されるが、それは薄い刃部である。

7と8は小形の磨製石斧。

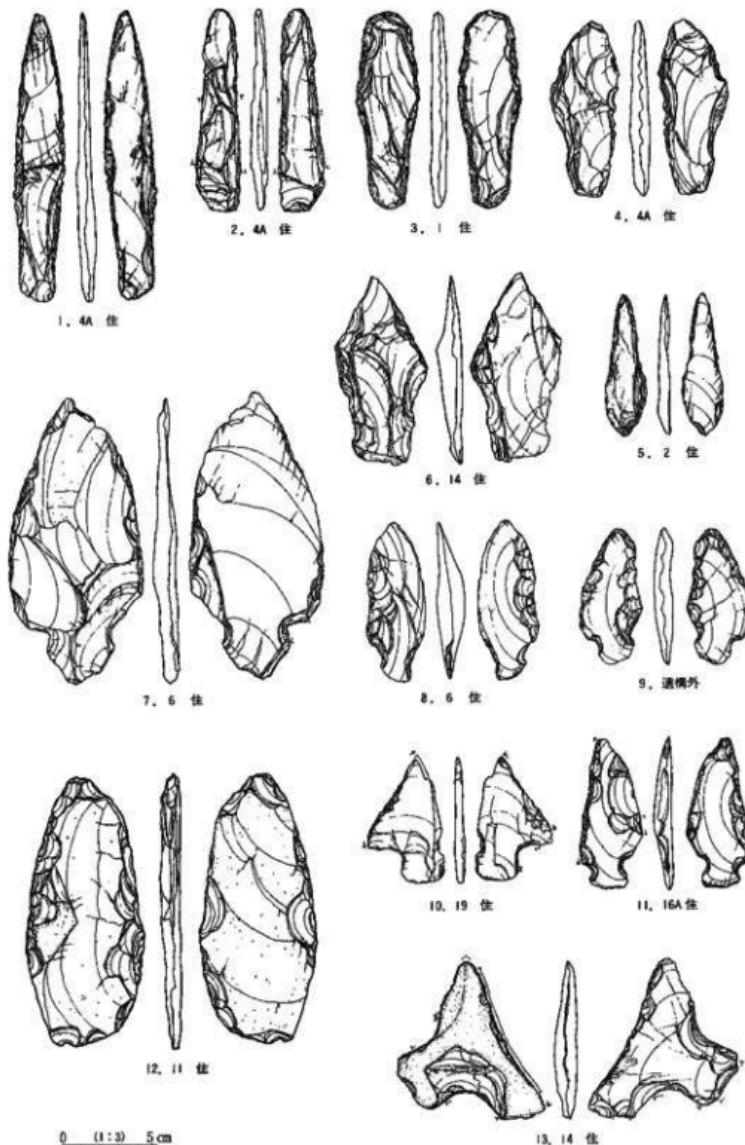
第24図：磨製石斧

1と2は半磨製。側刃の剝離面を残し、素材が薄く均整のとれた形態が特徴である。刃部は片面刃。3から9は蛤刃の磨製石斧。大形で丁寧に製作してある。



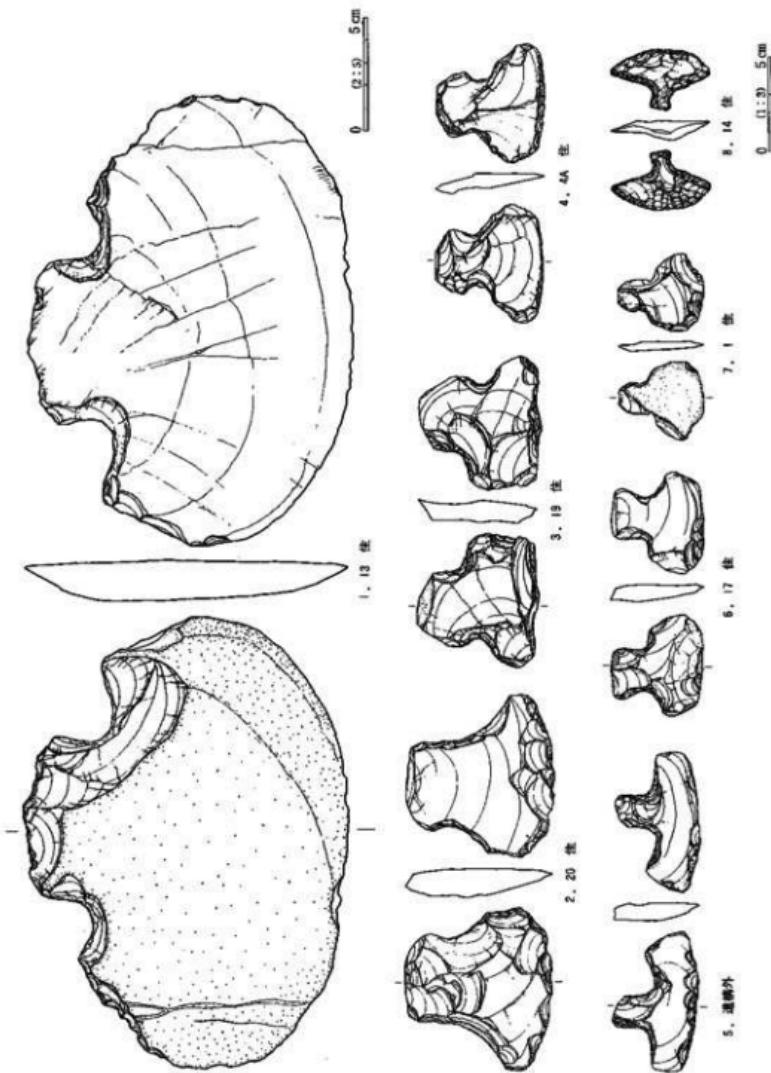
第17圖 石 簡

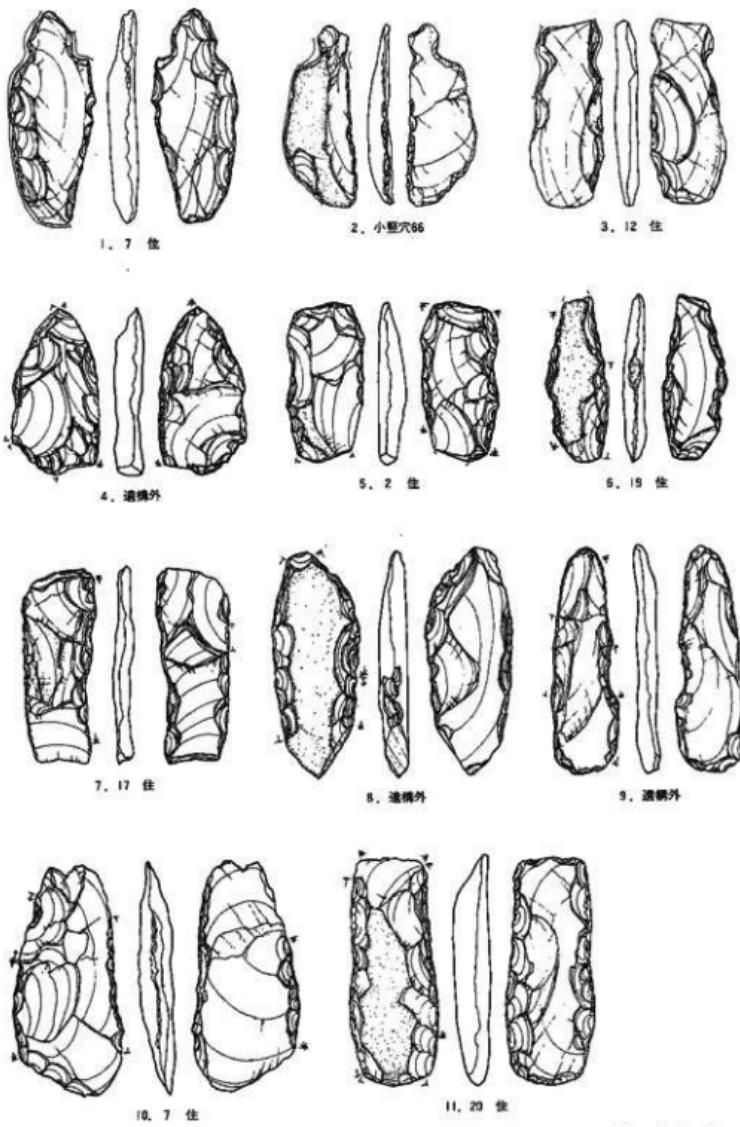
0 (1:2) 5cm



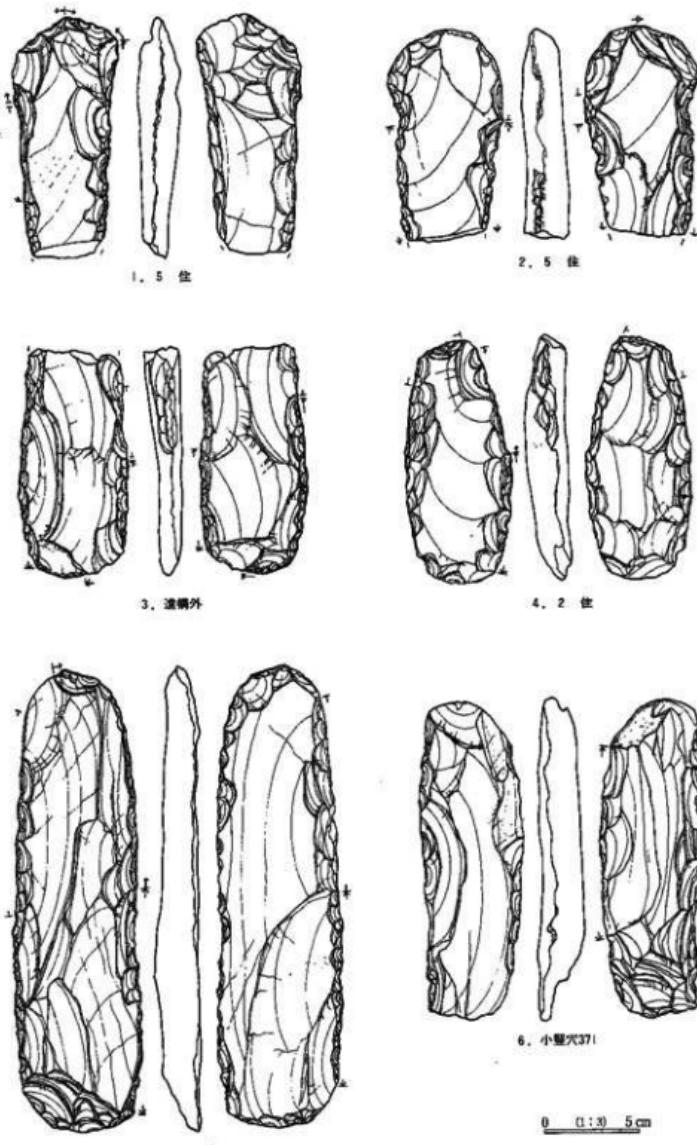
第18図 尖頭器

第19图 横形石匙

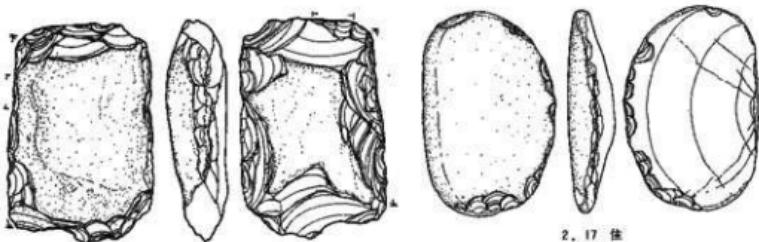




第20図 線形削器類



第21図 細形削器類

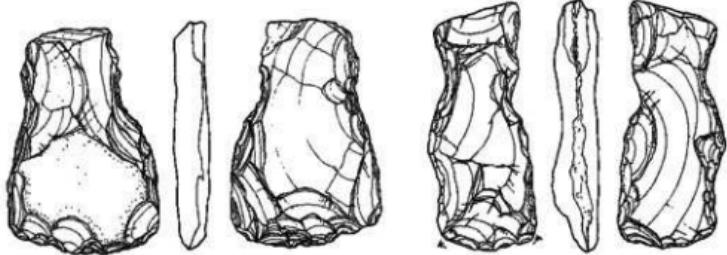


1. 道標外

2. 17 住

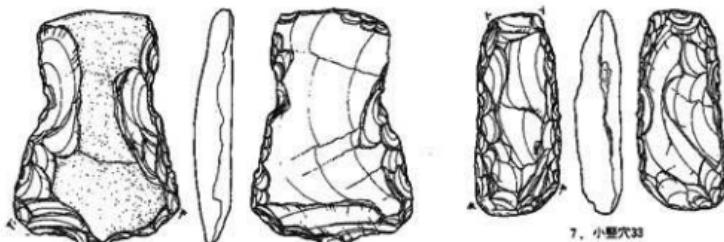


3. 6 住



4. 道標外

5. 7 住

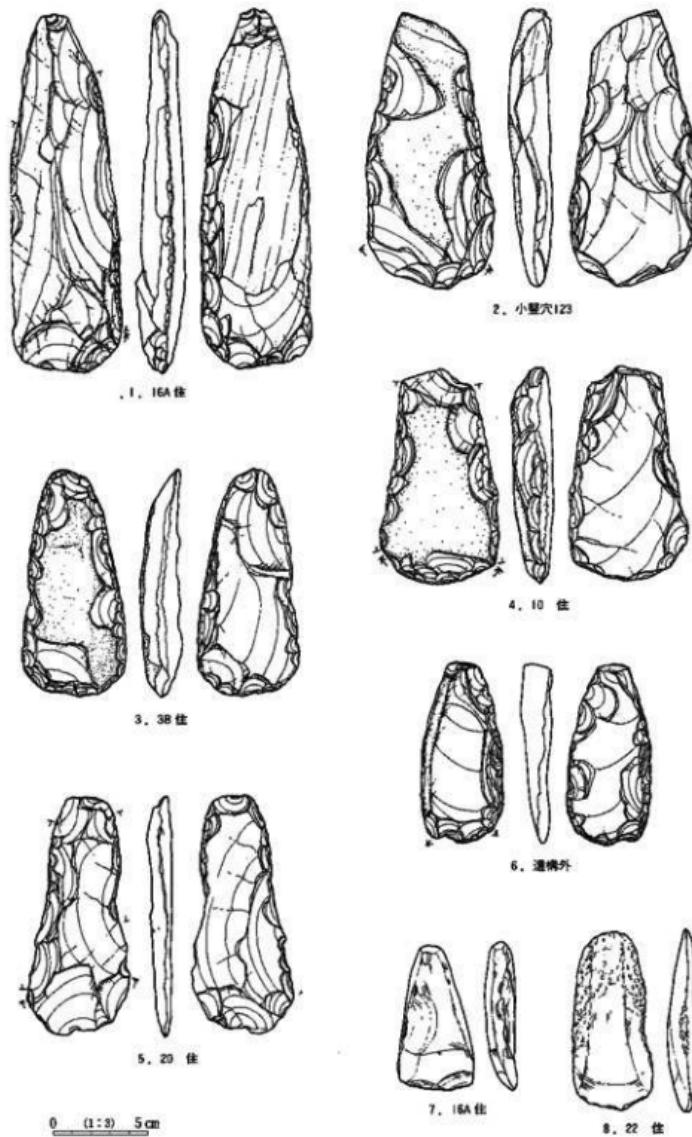


6. 38 住

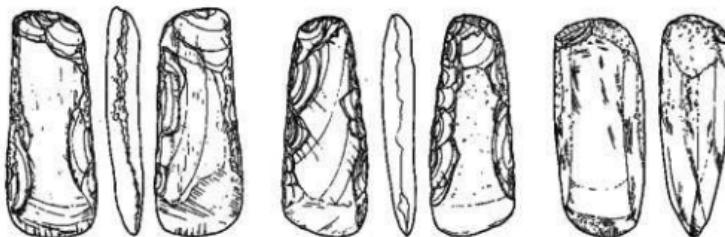
7. 小堅穴33

0 (1:2) 5 cm

第22図 削器と打製石斧



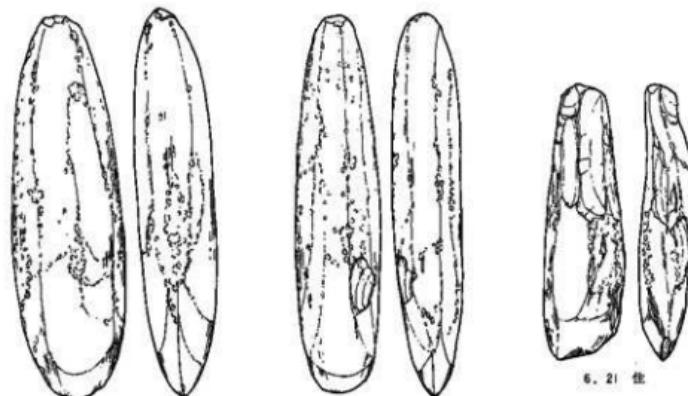
第23図 打製石斧、ヘラ状石器、磨製石斧



1. 小堅穴291

2. 道橫外

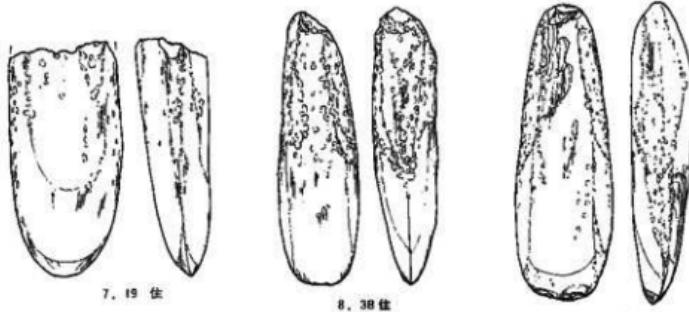
3. 22 住



4. 道橫外

5. 21 住

6. 21 住



7. 19 住

8. 38 住

9. 4A 住

0 (1:3) 5 cm

第24図 磨製石斧

3 南平遺跡にみられる二種の陥し穴

櫻井 秀雄

南平遺跡からは26基の陥し穴がみつかった。これらのうち小竪穴347を除いた25基については、調査最終段階で重機による断ち割りを行い、逆茂木痕と考えられるピットの断面を観察した。その結果、南平遺跡にみられる陥し穴には、「埋め込んだ」タイプと「打ち込んだ」タイプの2種が認められることが明らかとなった。陥し穴については多くの研究が積み重ねられており、その分類も多くの論者によって様々な視点からなされてきているが、今回は南平遺跡の陥し穴についてこのような逆茂木の埋設方法に基づいた分類を行い、現段階での考察を加えてみたいと思う。まず、南平遺跡にみられる陥し穴を以下のように分類してみる。

A型 逆茂木を「埋め込んだ」と理解できるもの。

A1型 長径が1.5m～2m、短径が1m程度の橢円形の平面プランをもち、深さが1m程度のものを主体とし、底面が平坦で広いもの。逆茂木痕は2つ有するものが多い。

A2型 直径が1m～2m程度の、ほぼ円形の平面プランをもち、深さは1m～1.5m程度の浅いものを主体とし、底面が平坦で広いもの。逆茂木痕が1つ有するものが多い。

B型 逆茂木を「打ち込んだ」と理解できるもの。長径4m、短径1m程度の、細長い平面プランをもち、深さも1.5m程度と深く、横断面がV字状を呈している。逆茂木痕は数本であるものが大半である。

C型 逆茂木を有しないもの。形態的にはA2型に類似している。

この分類に従えば、A1型が5基、A2型が7基、B型が12基、C型が2基、ということになる。今回図示したものとしては、A1型としては小竪穴366（長径167cm×短径100cm×深さ45cm、以下同様）、同379（160×71×35）、同368（214×110×72）、同363（203×108×73）が、A2型としては小竪穴250（125×120×85）、同352（135×120×98）、同364（117×88×58）が、B型としては小竪穴134（326×142×178）、同135（334×110×130）、同351（325×92×200）、同367（364×95×120）、同372（315×90×125）、同374（350×138×220）が、C型としては小竪穴361（183×157×88）が、それぞれ該当しよう。

さて、これらの陥し穴については、調査段階からすべて縄文時代に属するものと考えてきた。このうちA型およびC型については從来論じられてきたように縄文時代に構築されたものとして理解してよいであろう。しかしながら逆茂木を「打ち込んでいる」B型については調査担当者として縄文時代の所産であるという自己の先入観念をひとまず破棄する必要性に迫られた。その理由には次の2つがあげられる。

- ① 断ち割った断面を詳細に観察してみると、逆茂木の先端を鋭く角錐状に多くの場合4つの

面を作り出していることが観察でき、何らかの金属製工具をもってしなければ不可能ではないかと考えられること。

- ② 非常に狭いB型の底面に数本の逆茂木を「打ち込む」ことには現在の「かけや」に頼する道具が不可欠であると考えられること。

このような事実とともに、B型陥し穴のなかには逆茂木の一部が炭化した状態でみつかったものがあり、そのうちの2点を古環境研究所に委託して放射性炭素年代測定を実施したところ、いずれも16世紀代という結果が導き出されたのである。つまり中世末期から近世初頭頃に比定される年代である。(詳細は次項参照) この測定結果を知られた時には、正直いってその測定年代の新しさに驚きを隠せなかった。しかしながら、これら逆茂木を「打ち込んでいた」B型陥し穴が16世紀代の所産であるとするならば、さきにあげたような調査段階で想起された「縄文時代の陥し穴への2つの疑念」も氷解するのである。

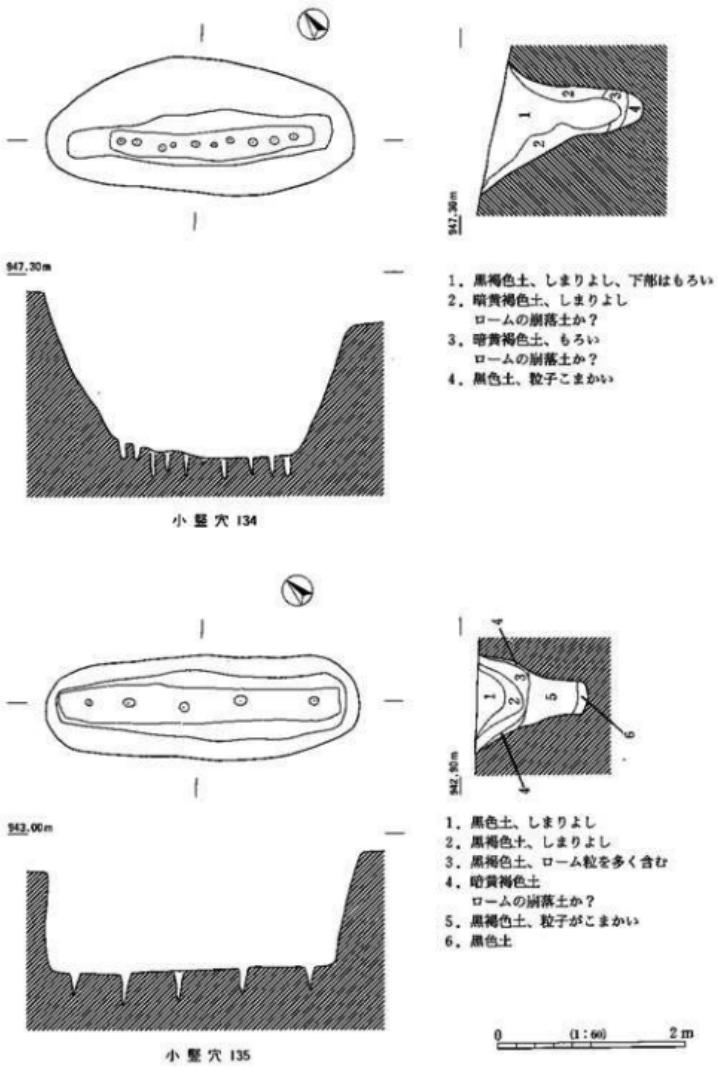
ここで注目されるのは山梨県丘の公園第5遺跡での保坂康夫氏の知見である。丘の公園第5遺跡でも南平遺跡で認められたB型陥し穴と同様なタイプの陥し穴が5基みつかっているが、保坂氏はこれらの陥し穴には「両端部の底部付近に掘削工具痕が残存するもの」があることを認め、その部分を石膏で型取りし、モデリング陽像を作成した。そしてその詳細な分析によって、保坂氏は「工具には鈍角に柄のついた鉛のようなものであったと考えられる」とし、「古代以降、特に中世あたりの所産の可能性を考えておきたい」と述べている(注1)。このような掘削工具痕の分析から導き出された保坂氏の知見も、今回の放射性炭素年代測定結果とその年代観がほぼ一致するのである。なお、南平遺跡においても、底部近くの壁面に掘削工具痕が残存しているものが確認されている(注2)。

陥し穴から遺物が出土することは極めて少ない。南平遺跡では小竪穴131と小竪穴351から縄文時代中期中葉の土器が出土しているにとどまる。縄文土器が出土した段階でB型陥し穴も縄文時代の所産であろうと調査段階では安易に理解してしまったが、これはあくまでも遺構年代の上限を示しているにすぎないのであれば、今回の放射性炭素年代測定結果とも齟齬をきたすことはないと考えられる。

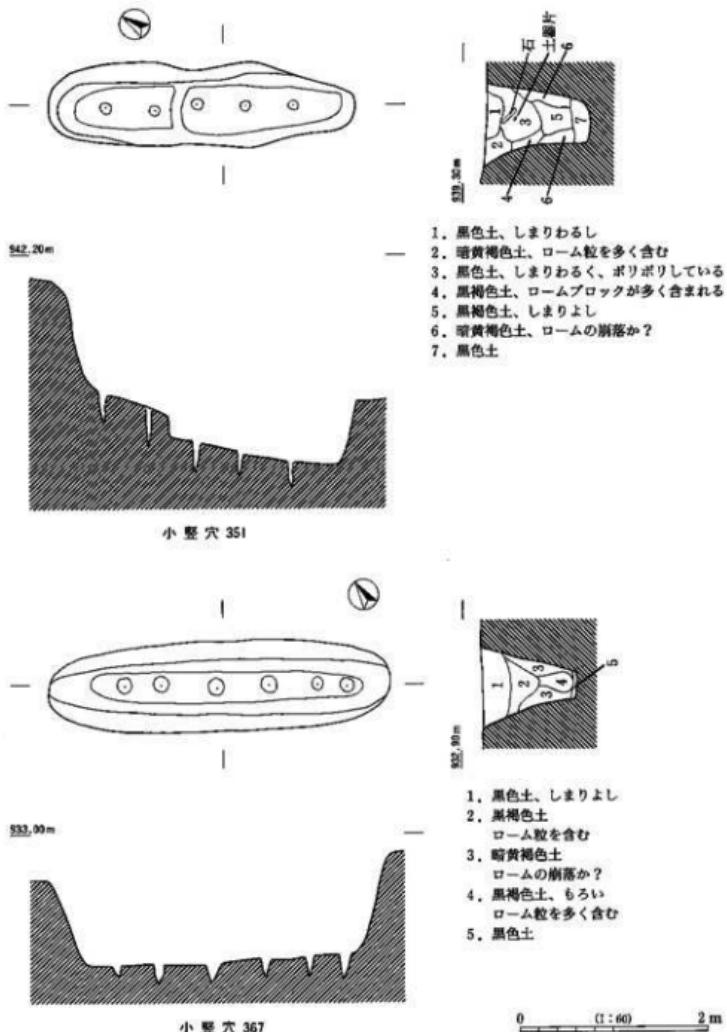
以上示してきた論拠に基づくならば、B型陥し穴は、中世末期から近世初頭頃に構築されたものであると考えることができよう。また断面観察でみられたように逆茂木を深く打ち込んでいることから類推すれば、逆茂木の上端部は、鋭く尖っていたとは考えにくいのではないかろうか。その点からもA型・C型とはタイプの異なるものであることが理解できるのである。

注1 保坂康夫「丘の公園第5遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会、1990年。なおB型陥し穴の定義についても本書を参考とした。

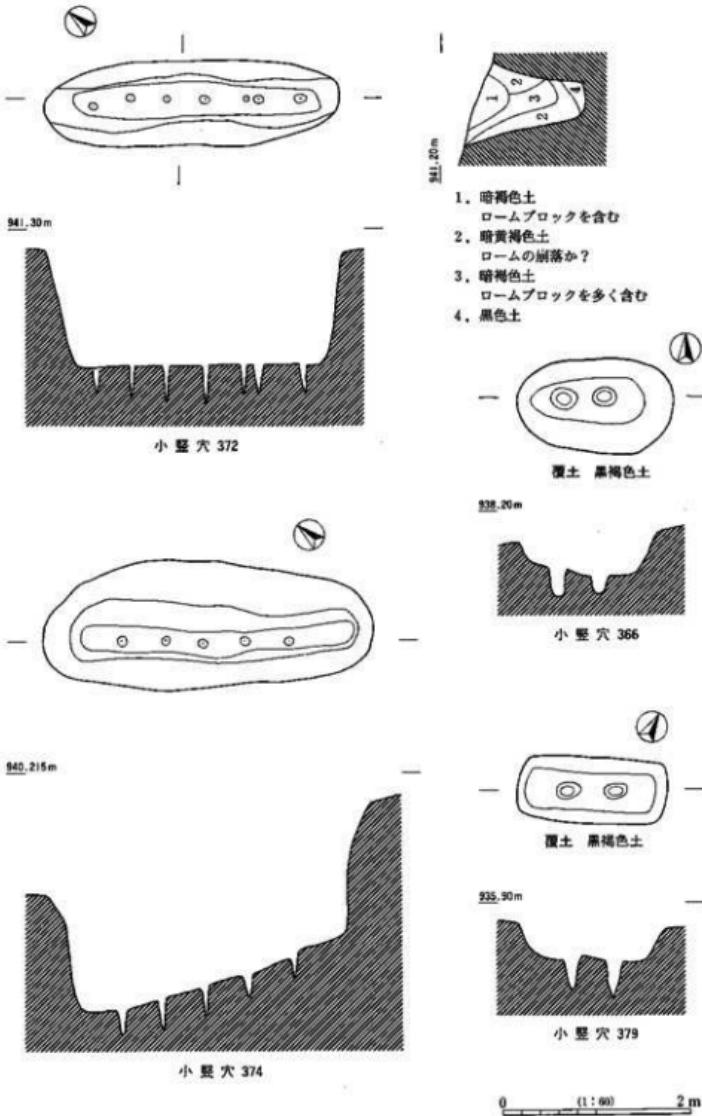
注2 南平遺跡における工具掘削痕については櫻井がけがで療養中の間、代わりに現場を担当した平出一治が確認している。



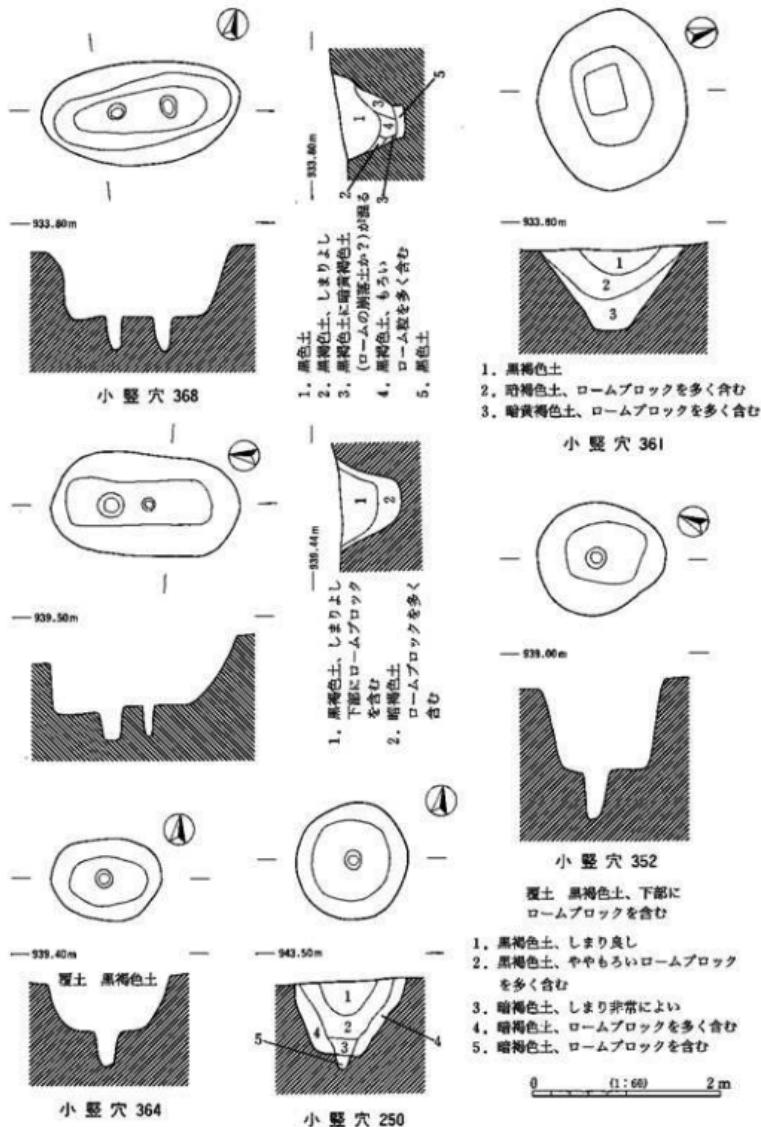
第25図 豈し穴 (1)



第26図 陥し穴 (2)



第27図 陥し穴 (3)



第28図 豊 し 穴 (4)

4 原村、南平遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

No	試料	試料の種類	前処理・調整		測定法
1	小豈穴135	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	石墨調整	AMS法
2	小豈穴372	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	石墨調整	AMS法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\sigma^{13}\text{C}$	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代	測定No Beta-
No 1	510±40	-29.4	440±40	交点 AD 1450 2 σ AD 1420 TO 1505 AD 1595 TO 1620 1 σ AD 1435 TO 1470	112539
No 2	480±50	-31.6	380±50	交点 AD 1485 2 σ AD 1435 TO 1650 1 σ AD 1450 TO 1525 AD 1560 TO 1630	112540

(2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年 AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\sigma^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\sigma^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年 BPより古い試料には適用できない。

5) 測定 No

本試料の測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定 No を意味する。

5 南平遺跡出土の琥珀製品の分析報告

(財)元興寺文化財研究所

分析の概要

1. 分析目的

南平遺跡出土琥珀製品が、琥珀であるかどうかの確認と、産地同定を行う。

2. 使用機器・原理

- フーリエ変換型赤外分光光度計 [FT-IR] (日本電子製 JIR-6000)
- 赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

3. 分析方法・条件

- KBr 錠剤法 [KBr (臭化カリウム) 錠剤法 試料を KBr と混合、圧縮し錠剤を作製して行う分析法]
- 分解能 1 cm^{-1} 、検出器 TGS

分析結果

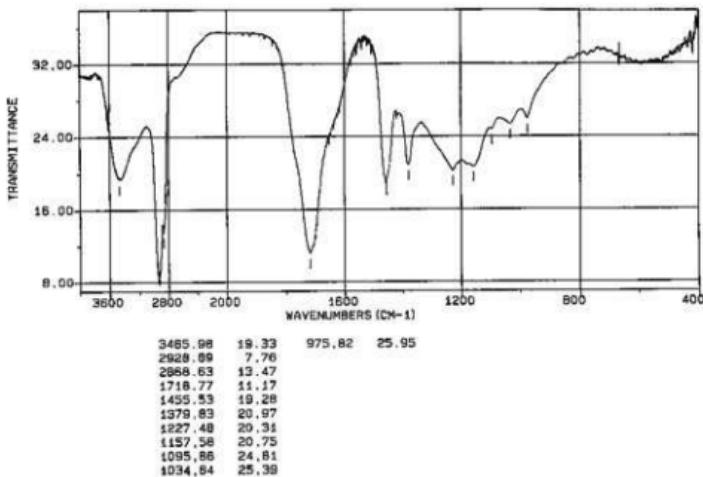
出土琥珀は、劣化していない部分の赤外吸収スペクトルが得られればその産地同定は可能である。しかし、劣化が激しいと、全体的に吸収はブロードになり特徴的な吸収が消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。

分析に使用した破片は、肉眼による観察では、比較的失透がなく、全体的に劣化は少ないと思われた。その中でも堅くてより健全な部分を選んで FT-IR による分析を行った。

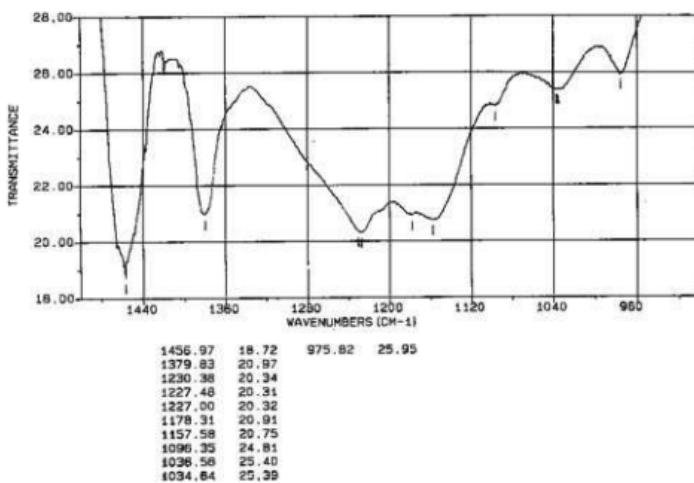
その結果、 $3500\sim2800$ 、 1720 、 $1500\sim800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収から琥珀であることが確認できた。次に、 $1800\sim800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置および強度より、産地の判明している標準となる琥珀から得られた吸収と比較し、産地同定を試みた。その結果、今回分析した試料は、 $1300\sim800\text{cm}^{-1}$ の吸収が鏡子産の琥珀と比較的似ている。しかし、 1230 、 1160 、 1030 、 980cm^{-1} の吸収位置および強度が鏡子産のものと完全に一致しなかった。また、日本で最も産出量の多い久慈産の琥珀とはかなり異なる吸収が得られた(第29図、30図)。

琥珀の産地は国内でも、少量産出地も含めると10ヶ所以上もある。また国外でも各地で産出する。その内、主産地についての FT-IR 分析はすでに報告されている。また、出土琥珀は劣化状態が様々でそれによって吸収位置や強度が変化する。

以上のことより、現時点での琥珀は鏡子産に似ているが産地を限定することはできなかった。(室賀照子「赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析」『考古学と自然科学』第9号参照) 今後は、少量産地の分析を行い、より多くの標準となる分析値を収集するとともに、FT-IR 以外の分析法も併用することで様々な状態の琥珀の産地同定が可能になると考える。



第29図 南平遺跡出土琥珀の赤外吸収スペクトル



第30図 南平遺跡出土琥珀の赤外吸収スペクトル（一部拡大）

IV まとめ

南平遺跡の発掘調査から多くのことが明らかになりました。以下、簡単ですがその成果をまとめてみます。

まず、縄文時代早期末に比定される、集石を伴う小竪穴が1基ですが発見され、すでにこの時期には南平遺跡に縄文人が足跡を残していたことがわかりました。

南平遺跡が最も栄えていたのは縄文時代中期中葉頃（今から約4500年前）です。なかでも新道式から藤内式の時期の遺構が中心を占めており、住居址群は環状にめぐっています。また原村では出土例が極めて少ない土偶が3点出土していることも注目されます。また琥珀玉はFT-IR分析を行い、産地の限定はできなかったものの、千葉県銚子産のものと「似ている」との結果が得られました。

また、今まで縄文時代のものであると考えられてきたB型陥し穴が、今回の調査によって中世末から近世初頭頃につくられたものであることがわかりました。この問題については、これから多方面にわたってさらに検討していかなければなりませんが、今後の陥し穴研究へのひとつの問題提起になるものと思われます。

このように南平遺跡からは貴重な発見が多くありました。しかしこれから整理・研究を進めていかなくてはならない課題も多く残っています。

まず、縄文土器の整理と研究があげられます。出土した縄文土器の中には、地元の土器に混じって、北陸地方や東海地方などからもたらされたと思われる他地域の土器もみられています。このような土器の分析も含めて、土器の整理・研究を進めていく必要があります。また、石器の出土量（とりわけ磨石・凹み石類）も相当数にのぼっていますので、その整理・研究もこれから行っていかなければなりません。

そして、こうした整理・研究をもとに、南平遺跡にみられる縄文中期の集落構造を解明することも重要課題のひとつとしてあげられます。今回は遺跡のひろがる尾根全域を調査しましたので集落のひろがりをつかむことができました。また南平遺跡で縄文集落の営まれた時期は、主に新道式から藤内式という比較的短い期間ですので、縄文中期の集落研究には非常に適した遺跡であるといえるでしょう。

南平遺跡はたくさんの財産を我々に残してくれました。後日刊行予定の正式な報告書ではこの貴重な財産から少しでも多くのことを引き出していきたいと考えています。

発掘調査からこの概報作成にあたっては、多くの方々から暖かいご指導・ご協力をいただきました。最後になりましたがここに心から御礼を申し上げます。

（櫻井 秀雄）

報告書抄録

ふりがな	みなみていらいせきはくつちょうさがいほう							
書名	南平遺跡発掘調査概報							
副書名	原村の縄文遺跡がいまよみがえる							
卷次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	44							
編著者名	櫻井秀雄 川崎保 角張淳一							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村12080 TEL 0266-79-2111							
発行年月日	西暦 1998年03月							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南平	長野県諏訪郡 原村 柏木	3637	19	37度57分39秒	138度12分12秒	19970506～19971117	15,445	平成9年度県営圃場整備事業原村西部地区
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		突起事項	
南平	集落跡	縄文時代 早期	小堅穴	1基	土器		環状にめぐる縄文中期中葉の集落の全貌が明らかになった。	
		中期	住居址 小堅穴 (うち陥し穴14基)	27軒 355基	土器・石器・土偶・琥珀玉		中世から近世初頭の陥し穴の存在がたしかめられた。	
		中世～近世 初頭	陥し穴	12基				

原村の埋蔵文化財 44

南平遺跡 発掘調査概報

発行日 平成 10 年 3 月

発行 原村教育委員会

〒 391-0104 長野県諏訪郡原村

印 刷 もえぎ企画書籍

〒 394-0043 四谷市御倉町 2-21

TEL 0266-22-4892



南平遠路から諏訪湖を望む



南平遠路（南から）

